うと
歴史
観光
ガイド

宇 土 市 歴 史 年 表

西暦	年号	月	日	主なできごと	日本・外国
前400～200万					人類の出現
前 9万				阿蘇山の大噴火（ASO4）	
前2万2千				AT（姶良カルデラ爆発）	
前1万5千	後期旧石器			上網田町田平遺跡でナイフ形石器を使用	
前 1万	縄文草創期				土器の使用が始まる
前 7000	縄文早期			押型文や撚糸文土器が作られる	竪穴住居が作られ，集落を営むようになる
前 4000	縄文前期			Ah（鬼界カルデラ爆発ーアカホヤ）	漁労活動が盛んになり，貝塚が造られ始める
				条痕文や沈線文土器（轟式・曽畑式土器）が作られる	
前 3000	縄文中期			太型凹文（阿高式土器）が作られる	
前 2000	縄文後期			磨消縄文土器（西平式土器）が作られる	
前 1000	縄文晩期			凸帯をめぐらした土器が作られる	
前 350	弥生前期			低湿地に集落を作り，水稲耕作を行う	稲作技術が朝鮮半島から伝来
				朝鮮系無文土器が見られる（宇土城・石ノ瀬）	この頃，北部九州に王墓が造られはじめる
前 150	弥生中期			北部九州に甕棺墓が盛行（宇土半島まで分布）	
57	弥生後期				倭の奴国王，漢の光武帝より印綬を受ける
107					倭国王帥升，後漢に生口献ず
239	魏景初 3				耶馬台国の卑弥呼，魏に朝貢
280	古墳前期				近畿地方に大古墳築かれる
				宇土半島基部に，竪穴式石室に割竹形木棺を納めた前方後円墳が造られる	
				宇土半島基部の前方後円墳が巨大化し，竪穴式石室に舟形石棺を納める（向野田古墳）	
400	古墳中期				
				横穴式石室が造られる（城二号墳）	
413					倭王，中国に朝貢
500	古墳後期			横穴式石室が主流となる，装飾古墳盛期	
527	（継体）21			筑紫君磐井の乱	
				不知火，松橋地方で須恵器の生産始まる	
				宇土半島や天草地方で製塩が行われる	
552	（欽明）13				仏教伝来
645	（大化） 1				大化の改新
663	（天智） 2	8			白村江の戦い
694	（持統） 8			このころ肥後国成立	
696	（持統）10			このころから肥後で寺院の建立がはじまる	
698	（文武） 2	5		太宰府，筑前大野，肥後鞠智城を修築	
710	和銅 3	3	10		平城遷都
750	天平勝宝2	4	5	宇土郡大宅郷の戸主として額田部君得万呂（正倉院文書）	
790	延暦 9	2	23	浄水寺の南大門開基の碑文建立	
794	延暦 13	10	22		平安遷都
986	寛和 2			清原元輔，肥後守となる	
1192					鎌倉幕府成立
1232頃	寛喜年間			聖光（筑後）善導末寺（伊津野）西光院を建立する	
1260	正元 2	1	10	寒巌義尹，尼修寧とともに如来院を草創	
				（宇土如来寺釈迦如来胎内銘）	
1269	文永 6			寒巌義尹，素妙尼の招きで如来寺を創建	
1283	弘安 6			寒巌義尹，河尻泰明の外護で大慈寺（熊本市）を創建	
1300	正安 2			寒巌義尹没，年81	
1334	建武 1				建武の中興
1338	暦応 1	8	11		室町幕府成立
1346	興国 7	9	11	少弐頼尚三日寺（如来寺）に宿営	
1348	正平 3	2		征西将軍宮懐良親王，宇土津に来着	
1350	正平 5	8	19	宇土壱岐守高俊五輪塔銘	
1358	正平 13			名和氏，伯耆国（島根県）より八代に移住	
1392	明徳 3				南北朝合一
1467～	応仁 1				応仁・文明の乱
1482	文明 14	9		名和顕忠，高田攻撃（相良，名和氏の抗争開始）	
1501	文亀 1	5		宇土為光，菊池能運から守護職を奪う	
1503	文亀 3	9		菊池能運，隈府を回復し宇土為光を殺害	
1504	永正 1	2		名和顕忠，八代古麓城を開城（相良氏入城） その後、宇土城（西岡台）に入る	
1543	天文 12	8	25		鉄砲伝来
1549	天文 18	7	22		キリスト教伝わる
1573	天正 1	7			室町幕府滅亡

西暦	年号	月	日	主なできごと	日本・外国
1587	天正 15	4	17	宇土城主名和顕孝，秀吉に降伏	
		4	21	豊臣秀吉宇土城（西岡台）に至る 加藤清正に宇土城を守らせる	
		6	2	豊臣秀吉，佐々成政に肥後国を与える	
1588	天正 16	4		名和顕孝大坂へ 名和顕孝の弟顕輝宇土城で反乱を起こす	
		4	16	名和顕孝の弟顕輝，薩摩出水で自尽，年19	
		閏5	14	豊臣秀吉，佐々成政に自尽を命じる	
		閏5		秀吉，肥後国を加藤清正，小西行長に与える	
		6	28	小西行長宇土城に入る	
1589	天正 17			小西行長宇土城（城山）築城開始	
		11		加藤・小西，天草五人衆を討つ	
1590	天正 18	9	1		豊臣秀吉の全国統一
1592	天正 20				文禄の役（朝鮮出兵）
1597	慶長 2				慶長の役（朝鮮出兵）
1600	慶長 5	10		行長滅亡。清正，肥後全領（天草・球磨を除く）を拝領	関ケ原の戦い
1603	慶長 8	2	12		江戸幕府成立
1611	慶長 16	6	24	加藤清正没，年50	
1632	寛永 9	12	9	細川忠利，熊本城に入る	
1637	寛永 14	10		天草・島原の乱起こる	
1646	正保 3	6		細川宮松（行孝）に宇土三万石を内分	
1652	慶安 5			細川行孝宇土に入る	
1663	寛文 3			轟泉水道完成	
1756	宝暦 6			宇土町を准町とする	
	宝暦年間			宇土細川藩主細川興文が学問所温知館を設立	
1769	明和 6	6		細川興文，轟泉水道を馬門石で改修	
1772	明和 9	1	21	細川興文（月翁）隠居願出	
	明和年間			桂原（宇城市不知火町）の蕉夢庵成る	
1780	安永 9	11		宇土町5丁目橋石橋懸替認可	
1784頃	天明年間			細川月翁網津に鹿夢亭を営む	
1785	天明 5	7	5	細川月翁没，年63	
1789	天明 9				フランス革命
1792	寛政 4	4	1	雲仙眉山崩落，寛政の大津波	
1793	寛政 5			網田焼創業（一説，寛政4年4月）	
1822	文政 5	4		網田焼御用献上中止，産物受込方引受	
1855	安政 2	11		花園堤築立，宇上川吐合築切，樋発塘掘切工事成る	
1864	元治 1			定府屋敷を整備するため埋立工事	
1867	慶応 3	10			大政奉還
1868	明治 1				明治維新
1869	明治 2	1		版籍奉還 細川韶邦は熊本藩知事，相良頼基は人吉藩知事となる	
1877	明治 10				西南の役
1879	明治 12	4	15	宇土第百三十五国立銀行創業	
1880	明治 13	4		自助社を宇土に創設	3・17国会期成同盟を結成
1884	明治 17	5		三角港起工（明治20年8月15日開港）	
1891	明治 24			熊本電燈会社開業	
1892	明治 25	10	26	私立鶴城学館設立許可（11月17日，仮開館）	
1894	明治 27				日清戦争
1895	明治 28	1	28	九州鉄道川尻松橋間開通，宇土・松橋停車場開業	
1896	明治 29	9	30	営業満期前特別処分，株式会社九州商業銀行と商号変更	
1899	明治 32	5	15	九州商業銀行本店を熊本市に移し，宇土に支店を置く	
		12	1	九州鉄道三角線開通，住吉・網田・三角停車場開業	
1902	明治 35	4	1	私立鶴城学館閉館	
		12	14	九州商業銀行破産宣告	
1904	明治 37				日露戦争
1907	明治 40	7	1	九州鉄道株式会社国有鉄道に買収	
1910	明治 43				日韓併合
1921	大正 10	4	11	県立宇土中学校設立	
1937	昭和 12				日中戦争
1941	昭和 16	9	1	日本合成化学工業株式会社熊本工場創業開始	
1945	昭和 20	8	10	宇土町の中心部空襲	8・9長崎に原子爆弾投下
1946	昭和 21				日本国憲法公布
1954	昭和 29	4	1	町村合併，宇土町・花園村・轟村・緑川村・網津村を廃して宇土町とする	
1956	昭和 31				国際連合加盟
1958	昭和 33	10	1	網田村を宇土町に編入，宇土市制施行	
1965	昭和 40	5		市役所新庁舎落成	
1972	昭和 47				沖縄返還
1990	平成 2				東西ドイツ統一
1995	平成 7	1			阪神淡路大震災

宇土市歴史年表

豊臣秀吉を魅了したキリシタン大名
小西行長

小西行長の生い立ち

父の立佐（隆佐）は、天正14年（1586）から石田三成とともに堺（大阪府）の代官（奉行）となり、兄の如清も堺奉行に就いています。小西家が豪商であったこと、父・兄が堺支配において重用され、豊臣期に堺奉行であったことが、豊臣秀吉のもとで行長が台頭する直接の背景となりました。

幼い頃、父の影響でキリスト教に入信したとされていますが、天正13年（1585）のイエズス会日本年報には、天正12年（1584）に洗礼を受けたと書かれており、はっきりしていません。

また、豊臣秀吉に仕えるまでの行長の動きは、史料が乏しいためによくわかっていません。

一説には、備前・美作（岡山県）を治めていた宇喜多直家に仕えており、直家が羽柴（豊臣）秀吉を通じて織田信長に降伏した際の連絡役を務めていたといわれています。

天正8年（1580）頃から父・立佐（隆佐）とともに秀吉に重用され、天正9年（1581）に播磨室津（兵庫県）で所領を得て、天正10年（1582）には小豆島（香川県）の管理を任されています。

肥後入国以前

豊臣政権において、行長は領国を持ちつつ、秀吉と諸大名を取り結ぶ「取次」として動き、秀吉の命令を伝達するだけでなく、現地の情勢に応じて武将と相談し、秀吉の命令意図を実行できる立場にありました。

さらに、行長は天正11年（1583）に舟奉行に任命されたようで、天正12年（1584）には紀州雑賀攻めに際して水軍を率いて参戦、天正14年（1586）には赤間関（山口県）までの兵糧を輸送した後、平戸（長崎県）に向かい、松浦氏の警固船出動を監督しました。翌天正15年（1587）の九州征伐の時には、薩摩の現薩摩川内市にあった平佐城攻略の搦手口の大将として参加しています。

肥後半国の大名へ

天正16年（1588）、行長は、肥後（球磨郡を除く）の南北半国ずつを加藤清正と共に豊臣秀吉から与えられました（行長は肥後南半の宇土、八代、益城などを領有）。

行長は肥後入国当初、豊臣秀吉が九州出兵に際し名和氏から接収した中世宇土城（西岡台）に居住していました。しかし、中世宇土城は山城的様態、小規模な城下形態であったため、行長は入国後まもなく新城の築造に着手しています。

新城は中世宇土城（西岡台）の東、約300メートル離れた低丘陵上に築かれました。近世宇土城（城山）は、「外構」＝石ノ瀬城、「町」＝宇土町、「城」＝宇土城の3つで構成されています。石ノ瀬城は近世宇土城（城山）を防御する出城の役割を果たしていました。

行長は、宇土の町筋を近世宇土城（城山）に取り込み、拡大整備して城下町として機能させ、船場川を外堀に見立て、その外側の薩摩街道の出口の位置に石ノ瀬城を配した広大な城域を構想していました。このような形態を、「惣構」といいます。

かつては「惣構」に沿って掘割がめぐり、掘割は城の主郭部分（本丸・ニノ丸・三ノ丸）の大手を中心に伸び、主郭部分の一角には瓢箪渕という潮入り・船入りが存在していました。このように

近世宇土城（城山）は、海・河口部の取り込みを強く意識した城郭でした。

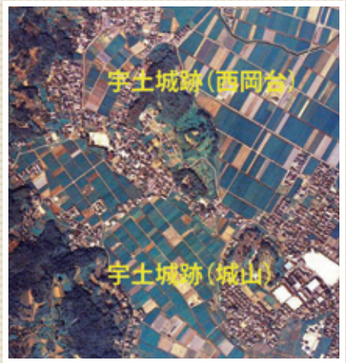
近世宇土城（城山）の主郭部分の北方、塩田地区には100軒以上の家臣屋敷の区画が、南北の6筋の道に沿って整然と並び、その区画ごとに堀状の溝をめぐらしていました。ここから掘割の河水が家臣屋敷の区画にまで毛細化していたことが想定されます。

このような家臣屋敷の区画性は家臣の独立性、小西氏家臣団の組織度の弱さをうかがわせますが、同時に行長と共に国元を留守がちな家臣団が、留守宅の防禦のためこのような屋敷形態をとらせたともいえます。

新城築城と同じ頃、天草では天草国人一揆が起こりました。原因は天草国人衆が新城の普請への参加を断ったことにあります。天草国人衆は、天正15年（1587）に起きた肥後国衆一揆（行長・清正以前に肥後領主となった佐々成政の時代に起きた地元勢力の反乱）に参加していませんでした。

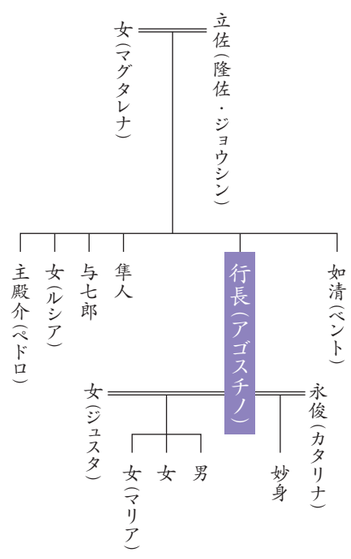
天草五人衆は秀吉から直接領地を安堵されており、そのため行長に対して対等な立場であると考えていたことが、行長への助力を拒んだ理由だとみられます。五人衆の拒絶を受けて、行長はまず、天正17年（1589）10月23日に一揆の中心人物・志岐麟泉（鎮経）と交戦し勝利を挙げると、次いで志岐城を攻略、志岐勢を本丸に追い詰めました。さらに同月28日には渡海してきた加藤清正の軍勢も加わり、11月8日に完全制圧を果たしました。最後まで敵対行動を取っていた天草伊豆守の本渡城も11月25日に落城し、天草五人衆といわれる天草国人衆の割拠基盤は壊滅しました。

行長の天草出兵に際して、一般的には行長自身では一揆を鎮圧できず、清正に援軍を頼んだように思われていますが、実情は違います。行長は清正の渡海を思いとどまらせようと説得しますが、それでも天草攻略に強引に割り込んできたため、両人で一揆を制圧することになったのです。



天草諸島は、天草国人衆のもとで活動する海上勢力の地盤であり、「唐入」をひかえて、海上勢力・海上能力の掌握を課題とする豊臣政権にとって、天草統治は非常に重要でした。

行長を取り巻く人々



名前	洗礼名	生没年	詳細
父　立佐（隆佐）	ジョウシン	？～1592	堺の豪商で，史料によっては隆佐とも書かれています。天文2年（1533）頃堺に生まれ，永禄3年（1560）から同7年（1564）の間，京都においてキリシタンとなり，宣教師の使者となって織田信長を訪ねました。天正8年（1580）頃から羽柴（豊臣）秀吉に重用され，同13年（1585）頃から河内・和泉両国の蔵入分代官となり，翌年には石田三成とともに堺政所に任じられました。天正15年（1587）には九州征伐の兵糧徴収に派遣され，翌年には秀吉の代理人として南蛮船がもたらした生糸の優先買い付けのため，肥前国長崎に赴いています。文禄の役に際し，肥前国名護屋で発病し，堺に戻り，文禄元年（1592）京都で亡くなりました。
母　クワサ	マグタレナ	？～？	関ヶ原合戦以前に亡くなったようです。これをきっかけに行長は聖堂付きの立派な墓地を設けました。

小西行長

朝鮮出兵

文禄元年（1592）に始まった文禄の役では、対馬領主・宗義智とともに第一軍として朝鮮へ出陣しました。行長たちの軍は漢城（現ソウル）を陥落するなどの活躍をみせますが、その後戦況はこう着しました。その間、行長・石田三成らが中心となり、和平交渉が進められます。

朝鮮出兵の際、日本軍は朝鮮半島南岸にたくさんの日本型の城郭を築きました。これを倭城といい、行長も熊川倭城を築城しています。

一旦は和平が成立しますが、すぐに決裂してしまい、慶長2年（1597）、再度朝鮮への進攻が開始されます。これを慶長の役といい、行長は加藤清正と共に先鋒に任命され、南原城攻略などの活躍をみせますが、慶長3年（1598）、秀吉の死によって戦いは終結しました。

和議交渉

行長は、朝鮮・明との交渉役に任命されます。朝鮮出兵が始まる以前から朝鮮とは協議してきましたが、豊臣秀吉の意向に沿うことはできず、ついにしびれを切らした秀吉が朝鮮へ渡海を決断し、文禄の役が始まります。行長は破竹の進撃を果たしますが、文禄2年（1593）1月5日、朝鮮・明連合軍の攻撃により、大敗北を喫します。その後日本軍の朝鮮攻略は膠着し、兵糧不足が表面化する中で、明との和議交渉が進められました。

さて、和議交渉のなかで明側から秀吉の降伏文書が要求されます。しかし、秀吉がそれを容認するはずもなく、結局行長と明の使者・沈惟敬が協議して秀吉の降伏文書を偽作しました。これは事態をできるだけはやく解決するための行為と考えられ、これ以上戦が長引き、豊臣政権が疲弊することを防ごうと行長が考えたからではないでしょうか。

文禄5年（1596）9月、明使節が大坂城の秀吉のもとにやってきます。秀吉はこれを明が秀吉に和平を請う使者と考えていました。そのため、明の使者が「汝を国王と為す」といったことで秀吉が激怒し、交渉の主導者であった行長の首を斬ろうとした、と一般的にはいわれています。しかし実際はそうではありませんでした。この謁見自体は無事終了したのです。事前にこういう形で和議交渉をしているということを、行長ははっきりと秀吉に報告・連絡しています。行長は秀吉の意向をふまえて明との交渉をしていました。

秀吉を怒らせたのは、自力で手に入れた朝鮮半島の南半分を手放し、朝鮮から日本軍を撤退せよと明側に迫られたためです。そして結局、朝鮮再出兵となってしまいます。

行長は熊川を拠点のひとつにしました。熊川という所は熊川邑城という邑

名前	洗礼名	生没年	詳細
兄 如清	ベント	？～？	立佐の長男で，天正7年（1579）頃までは法華宗徒でしたが，まもなくキリシタンとなり，同16年（1588）5月10日付けのイエズス会総長宛五畿内信徒代表者の連署状に署名しています。羽柴（豊臣）秀吉に重用され，室津や堺で要職に就いていました。立佐の死後，父の職を継承し，堺の代官になったものと考えられます。
弟 隼人		1561～1600	行長の異母弟とされ，行景，長元ともいわれます。隈庄城代を務めたようです。一説には主殿介が隈庄城代だとも。慶長5年（1600）の加藤清正による宇土城攻では，不在の行長に代わって宇土城代として奮戦します。当時麦島城代であった小西行重に 援軍要請を行いましたが，加藤軍によって阻止されたものの，その後も善戦しました。しかし行長の敗北を聞かされ，家臣の助命と引き換えに自刃しました。
兄弟 与七郎	ルイス	？～1593	母は不詳。朝鮮出兵に際して行長とともに出陣しました。行長軍は一旦は平壌城を占拠しましたが，文禄2年（1593）正月7日，明・朝鮮連合軍の総攻撃を受けました。行長は命からがら撤退しましたが，与七郎はこの戦いで戦死しました。
姉妹	ルシア	？～？	
兄弟［主殿介］	ペドロ	？～？	母は不詳。一説によると隈庄城代を務めたとされていますが，隼人が務めたともいわれています。天草国人一揆では，水野六左衛門（勝成）を従えて志岐城攻に参戦し，朝鮮出兵にも出陣したようです。
妻	ジュスタ	？～？	関ヶ原合戦後，親類ともども捜索され，徳川家康は彼女らを助命したといわれています。しかし以後の消息は不明です。

（集落・町）を城壁で囲んだ朝鮮側の城があった所です。

しかし、行長はこれを使わず、ここに隣接する海に飛び出したような丘陵に熊川倭城を築きました。この地は日本との交易が非常に盛んに行われており、そういう意味で水運の便利な場所でした。そこに行長が城を築けば、当然多くの船が停泊できる良好な港湾を備えることになります。

熊川倭城は、山頂に日本でいえば本丸や二の丸のような区画があって、そこから防御のために石垣を山の下にずっとバリケードのようにのばしています。このような石垣の築き方は、日本国内では見られず、朝鮮出兵の際に朝鮮に渡り、その朝鮮で大名たちが造った城では若干このような防御施設を使っている事例はありますが、基本的にはこれら倭城で使われています。

つまり、朝鮮に攻め込んだその戦いの中で、このような特殊な技術が発達していったということです。

独立した丘陵の山頂から山麓にかけてバリケードのように石垣がのびており、その石垣で囲まれた中に行長が館を構えて住んでいたと思われます。山の上から下まで続いている石垣は、塀のように山頂と山麓をつないで、敵の侵入を防ぐ役割を果たしていました。現在でも城壁や本丸、二の丸のような区画、天守台が残っています。おそらくこの天守台の上には、何階建てかの天守が建っていたと考えられます。

熊川は、韓国キリスト教発祥の地とされています。これは行長が熊川倭城に宣教師のセスペデスを招き、そこで彼が活動していたためで、韓国に初めてキリスト教が伝わった発祥の地、あるいは発祥地のひとつといわれています。

順天という所も、元々は町を囲んだ朝鮮側の城があった所です。ところが行長はここでも朝鮮側の城は利用しないで、この海に突き出た所に新たに城を築いています。

順天倭城は、城壁が五重にあって、外側を落としてもまだ内側に城があるので、これは絶対に落すことができないという朝鮮側の記録などが残っています。また、5階建てくらいの規模をもった天守が築かれていたようです。

現在でも城外側と城内側、そして中央に水堀の跡がしっかりと残っており、行長が築いた城がどういうものだったかということが、歩いてわかるような、良好な状態で残っています。絵画資料によると、石垣が非常に多く使われており、石垣の上に築地塀があって、その塀には鉄砲を撃つための穴がたくさん開いています。

名前	洗礼名	生没年	詳細
妻 永俊	カタリナ	1574～1649	皆吉久右衛門（続能）の子といわれており，行長との間に妙身をもうけました。後に島津忠清のもとに身を寄せ，忠清との間に一女桂安が生まれます。桂安は島津家久の側室となり，二代藩主となる光久を生みました。関ヶ原合戦後，大名は人質として妻子を江戸城へ送ることとなり，桂安が江戸に移る際には永俊も同行しました。しかし，江戸で永俊がキリシタンであることが発覚し，薩摩へ帰ることになります。何度も改宗を迫られた永俊でしたが，改宗を受け入れないことから，種子島へ追放の身となり，さらに娘の妙身，孫娘の・於鶴・満津も種子島への島送りとなってしまいました。永俊は種子島で13年過ごし，慶安2年（1649），75歳で亡くなりました。
息子		？～1600	関ヶ原合戦後，行長の12歳になる嫡男は騙されて大坂に送られ，輝元の命令で斬首され，その首は徳川家康もとに送られました。しかし家康は卑劣な行為であるとして首を受け取らなかったといわれています。
娘		？～？	志岐城代・日比屋了荷の子である小西弥右衛門に嫁ぎましたが，弥左衛門はマカオに追放され，亡くなっています。その後の消息は不明です。
娘	マリア	？～1605	宗義智に嫁ぎますが，関ヶ原合戦後，離縁され長崎に送られました。慶長10年（1605），同地で亡くなりました。
娘	妙身	？～1660	母は永俊。有馬式部大輔のもとへ嫁ぎ，満津が生まれ，後に薩摩へ移り，島津家家臣・喜入忠政と再婚します。忠政との間に於鶴（津留）が生まれました。後に種子島へ島送りとなり，万治3年（1660），同地で亡くなりました。

城門も単なる門ではなく、門の上に建物があり、その下に門を開くいわゆる櫓門の構造になっています。さらに小屋や蔵なども城内にはたくさんあります。当然兵士たちが生活したり、あるいは彼らの食糧などもこういった所に収められていました。従って城は非常に広く、その中にたくさんの兵士がいて、そして兵士たちが生活する空間がありました。このように、敵が攻めてきたときにも十分に守ることができる設備が備えられた本格的な城が造られていました。

関ヶ原の戦い

行長は、朝鮮半島から日本軍の撤退を完了させた後、政権の中枢に復帰し、豊臣秀吉に代わる豊臣政権の命令者となった徳川家康の指示で動くようになります。慶長4年（1599）に勃発した島津氏内部の権力闘争である庄内の乱では、庄内の状況を把握し、家康に代わって近隣大名に出陣を求める任務を寺内正成とともに与えられており、家康から派遣された上使といえます。

しかし、慶長5年（1600）に起こった関ヶ原の戦いでは、行長は家康と敵対する西軍の首謀者の一人でした。行長が西軍に与した理由は、朝鮮出兵をきっかけに強く結びついた三成や、以前仕えた宇喜多氏への義理、加藤清正との対立などが考えられます。

同年9月15日、東西両軍は関ヶ原（岐阜県）において激突します。行長の軍勢は朝鮮出兵での家臣団の消耗から立ち直っておらず、関ヶ原の軍勢も、国許に残した軍勢も意外なほど小規模でした。それで4000人の援軍が行長の軍勢にだけつけられています。これはおそらく三成の配慮によるものと思われます。

はじめ戦況は一進一退しますが、西軍の三成・行長・宇喜多・大谷の軍勢の他は、形勢を傍観して鳴りを潜めていました。そして小早川秀秋の裏切りがまず大谷吉継の軍に致命的な打撃を与えると、行長、宇喜多、次いで三成の部隊が相次いで崩れ去り、戦は東軍の勝利に終わって、家康の覇権が確立しました。

小西行長の最期

関ヶ原での敗北後、行長は伊吹山（岐阜県）山中に逃れましたが、落人狩りを指揮していた林蔵主と行き合い、家康のもとに自らを連行し褒美をもらうようにと求め、捕らえさせました。行長はキリシタンであったため自害せず、捕らえられることを選んだといわれています。

行長が捕らえられた2日後に三成が、その翌日には安国寺恵瓊が捕らえられます。3人は9月29日に大坂および堺の町を引き廻され、10月1日、京都の六条河原にて処刑された後、首は三条河原で晒されました。

イエズス会側の史料によると、行長の遺骸は教会に引き取られたようですが、どこに埋葬されたのかはわかっていません。

その後、行長は西軍に与したこと、キリシタン大名であったことなどから、国内ではあまり正当な評価を受けませんでした。しかし、行長が亡くなった7年後の1607年、イタリアのジェノバで行長を主人公とする音楽劇が作られ、1640年のフランス製日本地図には宇土、八代の地名がみられます。これは小西行長の影響によるものと考えられ、ヨーロッパでは信仰に篤い、忠義を重んじる武将として知られており、日本とは正反対の評価をされていました。

船場橋界隈　宇土市指定有形文化財・天然記念物

馬門石の眼鏡橋とエノキ

船場町・石小路町付近は、江戸時代はじめから宇土細川藩蔵屋敷、船手奉行屋敷をはじめ御船手衆、弓衆、鉄砲衆などの、武家屋敷が設けられ、荷物の集積場としても賑わっていました。この船着場の横に石造眼鏡橋があります。眼鏡橋の建造年代についてははっきりしませんが、江戸時代末期頃と思われます。規模は長さ13．7メートル、幅4．1メートルの単一アーチ橋で、石材は宇土市網津町で採れる馬門石と安山岩です。熊本藩では江戸時代末期から明治初期にかけて石造眼鏡橋が数多く造られました。この船場橋も同時期のものと思われ、現在道路改修などで眼鏡橋が数少なくなるなか、保存状態も良く、貴重な文化財です。

また、船場川両岸のエノキは、昭和53年（1978）10月9日に宇土市の天然記念物に指定されました。当初指定された10本のエノキのうち、6本は右岸の石小路町に、4本は左岸の船場町にありましたが、船場町側の巨樹2本が平成3年（1991）の台風19号で倒れたために指定から解除され、現存するものは8本です。その中で、幹囲3メートルを超えるものは、現在石小路町側に3本しか残っておらず、最も古いもので樹齢は150～200年程度と考えられています。馬門ピンク石で造られた船場橋とエノキの古木が立ち並ぶ姿は、宇土市民のふるさとの風景です。

船場橋

宇土藩米蔵跡・船場界隈

門内（もんない）界隈

宇土細川藩の武家屋敷

門内界隈は江戸時代の宇土細川藩の家臣たちの武家屋敷があったところで、当時の家並みや区画がところどころに残っています。「宇土武家屋敷（陣屋）絵図」をみると、宇土御屋敷を囲むように北東から南西（新小路～八代道）にかけて武家屋敷が建設されています。武家屋敷は、大きく宇土御屋敷の北側（本町筋側）から八代道にむけての区画、「本丁」通りを挟み、宇土御屋敷の南西側対面から八代道方面に向けての区画、さらに「裏丁」通りを挟んで、宇土御屋敷から八代道方面に向けての南側の区画から構成されています。宇土御屋敷の南西対面に間口30間（約54メートル）、奥行き28間（約50メートル）の家老佐方与左衛門の屋敷地があり（現宇土市民会館）、その東側に間口30間、奥行き16間（約29メートル）の家老井門次郎左衛門の屋敷地などがありました。

高月家住宅

天草四郎ゆかりの里

10～15歳ごろ宇土に暮らした天草四郎

島原の乱で一揆の総大将を務めた天草四郎（益田四郎時貞）は、一揆の直前まで江部村（現宇土市旭町）に住んでいました。江部に来る前は宇土市本町5丁目の平四郎の家に住んでいたとも、三日山如来寺で学んだことがあったともいわれています。四郎の家族は江部村庄屋次兵衛の脇屋（離れ屋）で暮らしていましたが、現在次兵衛の屋敷跡は不明で、また天草四郎が居住していた脇屋の位置についての記録も残っていません。島原の乱が勃発した後も四郎の母・姉一門は未だ江部村に居住していました。それを迎えに行った姉婿らが捕らえられ、取調べにより四郎の母・姉・宿主の江部村庄屋次兵衛一家が捕縛されてしまいました。その後島原の乱は、寛永15年（1638）2月28日に原城が落城、天草四郎が討ち取られ、幕府軍によって鎮圧されました。

天草四郎時貞
（1623～1638）

四郎は1623年に長崎で生まれ、宇土で育ちました。父親は益田甚兵衛といって、元は小西行長の家来で宇土の江部村（現在の旭町）に住んで農業をしていました。四郎は後に天草四郎時貞（洗礼名ジェロニモ）と呼ばれるようになり、キリシタンから"天の使い"とあがめられ、わずか15歳で天草・島原の乱（1637年）で3万7千人の民衆を指揮して強大な幕府軍と戦いました。

細川藩陣屋跡

1647年宇土御屋敷完成

熊本藩2代藩主細川光尚は正保3年（1646）8月、自ら宇土へ赴き、宇土藩初代藩主となる細川行孝の御屋敷（陣屋）建設地を見分のうえ、八代城北の丸（現八代市北の丸町）の家屋を解体し、その時に生じる資材を宇土へ移転する侍衆へ下げ渡すよう命令しました。陣屋とは、城郭のない小藩の大名の居所、屋敷のことです。

初めは地形が高く、水利の便が良い石ノ瀬町（現宇土市石小路町）が候補地でしたが、光尚からの許可が得られず、松山手永段原村のうち、本町筋南側（現新小路町宇土市教育委員会付近）を宇土細川藩陣屋と武家屋敷地に定めました。

正保4年（1647）9月頃には宇土御屋敷が完成したと思われ、同月の下旬には行孝の荷物が八代から積みだされました。

温知館（おんちかん）跡　宇土市指定史跡

江戸時代の藩校跡

宇土藩5代藩主細川興文は儒学に熱心な人で、宝暦13年（1763）に熊本藩の儒学者江口恵次郎や河添矢五郎を招いて藩校温知館を設立しました。その名称は論語の「温故而知新」（古きをたずねて新しきを知る）からとったものと思われます。学科は修身学・史学などがありましたが、判然とした区別はありませんでした。授業は毎日午前9時に始まり、習字の授業があり、11時より読書、午後1時に終わります。学校経費はすべて藩で賄い、生徒は入学金や謝礼・授業料は不要となっています。ただし、入学できるのは藩士の子弟のみで、藩士の教育機関であるので格式・禄高の高い嫡子が重視されました。就学の年齢については宇土藩の場合記録はありませんが、一般的に8歳での入学が普通だったようです。

宇土の張り子

素朴な味わいの工芸品

宇土の張り子は明治の初め、広島県の尾道から旅に出ていた夫婦が、本町1丁目の坂本家に1年近く滞在したお礼にと坂本勝治氏に、その技法を指導したのがはじまりと伝えられています。その娘のカツ氏が後を継ぎ、約70年にわたり宇土名物にまで育て上げ、昭和51年（1976）には熊本県ふるさと顕彰を受賞しました。また、カツ氏は昭和52年（1977）1月14日に宇土市の無形文化財に指定されました。カツ氏の後、孫嫁にあたる紀美子氏が受け継ぎましたが、平成23年（2011）に亡くなり現在は途絶えています。和紙1枚1枚をかた台にニカワという伝統的接着剤で張り合わせて原形を作り、昔ながらのドロ絵の具で彩色をする、その素朴な郷土の味が宇土張り子の特徴です。作品は四季に応じて異なり、形は虎、馬、獅子など20種類ほどあります。（熊本伝統工芸館にて展示）

うと地蔵まつり

肥後三大夏祭り

宇土市では、毎年8月23・24日に地蔵祭りが盛大に行われています。

当日は各町内の地蔵が沿道に引き出され、町の子どもたちにより美しく飾り付けられます。夜になればろうそくが灯され、子ども達が鉦を叩いて、「なむじのだいぶつさん（南無地蔵大菩薩）、あげてくださいおさいせん」とはやし立てます。また、各町内では数多くの「造りもん」と呼ばれる歴史上の人物や動物、世相風刺、物語の1場面等を題材にして作られる大がかりな工作品を道路沿いに展示し、技巧や華やかさを競います。

宇土における地蔵祭りの始まりは、宇土藩初代藩主細川行孝が筑後善導寺末寺として、現在の本町6丁目に円応寺を建立して以降のこととされています。寺には6体の古い地蔵尊があり、地蔵祭りは、元はこの地蔵尊に対するものであったといわれています。

宗福寺（そうふくじ）跡 宇土市指定史跡 と名和（なわ）家位牌 宇土市指定有形文化財

名和家の菩提寺

創立年代・・・永正年間（1504～1521）

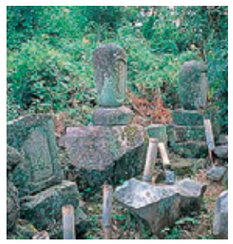
本尊・・・地蔵菩薩

宗福寺は、八代市妙見町の悟真寺の末寺で、宗派は曹洞宗です。永正年間（1504～1521）、名和伯耆守が名和家の菩提寺（ぼだいじ／一家が代々帰依して葬式・追善供養などを営む寺）として建立したもので、利屋貞和尚によって開山されました。古来、宗福寺に寄進されていた土地は、近世以降年貢地（有租地）となっています。名和氏が宇土の地を離れて以来、同所は椿原村（現宇土市椿原町）に維持管理され、現在に至っています。

宗福寺には、本尊と並んで安置されているふたつの位牌があります。一つは天文15年（1546）に死去した名和武顕の、もう一つは、永禄5年（1562）に死去した名和行興のものです。名和氏は相良氏と豊福の領有権を巡って長い間争っており、武顕・行興親子の時代も和睦と戦を繰り返していました。

御堂脇の墓域には名和氏代々とその親族が葬られていると考えられます。これら位牌と墓は毎年4月8日に「名和氏一族の会」の方々の参拝を得て、法要が続けられています。

宇土の地域史を語る上で貴重な位牌と墓地です。



宇土城跡（西岡台） 国指定史跡

鳥取県出身の名和氏が在城

宇土城の築城時期は不明ですが、鎌倉時代末期からは菊池氏系の宇土氏が、永正元年～天正15年（1504～1587）にかけては伯耆国（現鳥取県）出身の名和氏が在城したことは文献史料からわかっています。

城内をみると、千畳敷（せんじょうじき）と呼ばれる郭と三城（さんのじょう）と呼ばれる郭の2つが並んだ連郭式の城であったことがわかります。

千畳敷からは多数の柱穴が検出され、掘立柱建物が長期にわたって何度も建築されたことがうかがえるほか、千畳敷の北側から全国で初めて未完成の空堀がみつかっています。

天正16年（1588）に宇土城主となった小西行長は、その翌年から新しい城を城山に築き、西岡台は廃城となり、現在に至っています。

宇土城跡（西岡台）

宇土城跡（城山） 宇土市指定史跡

小西行長が築き、加藤清正が改修

小西行長は天正16年（1588）に肥後に入国すると、ひとまず西岡台に築かれていた宇土城に入り、まもなく西岡台の東に新城を築造しました。東西150メートル・南北130メートルの本丸を中心として二ノ丸・三ノ丸を備え、重臣屋敷や家臣屋敷を古城町から神馬町城、馬場の一帯に築いています。

しかしその後、関ヶ原の戦いで行長は敗れ、行長の弟隼人が城代として守っていた宇土城も落城、肥後一国を領有した加藤氏のもとで大規模な改修がなされたため、今みることができる遺構は基本的に加藤時代のものです。

加えて、慶長17年（1612）に破却された後、島原の乱後に再度破壊されたうえ、明治以降本丸域以外の開発造成も進み、かつての偉容をしのぶ材料はごくわずかしかありません。

轟自然公園

栗崎の天神樟（くす） 熊本県指定天然記念物

樹齢四百年以上のクスノキ

宇土市栗崎町の菅原神社境内にあるクスノキで「天神さんの樟」と呼ばれ、樹齢400年以上と伝えられています。

幹囲12．3メートル、樹高27．5メートル、枝張りは東西33メートルの広がりを持ち、遠望すると1本のクスノキなのに大枝が林立して森のようにみえます。幹にはしめ縄が巻かれ、ご神木の前には石の祠があります。

樹勢は良好で、主幹は地上2．5メートルの位置で二又に分かれ、その上にたくさんの大枝が広がっています。そのため昼間でも暗く、幽玄の世界を感じさせます。

戦前までは12月5日に「栗崎の火焚き祭り」が行われ、この木の前に薪を積み上げて大枝に火が届くように炎を上げていました。

不知火諾右衛門（しらぬいだくえもん）の墓 宇土市指定史跡

土俵入り「不知火型」創始者で第8代横綱

江戸時代の名横綱“不知火諾右衛門”は本名を近久信次といい、享和元年（1801）宇土市栗崎町に生まれました。子供の頃から宮相撲をとり、力持ちで有名でした。造り酒屋で働いていたとき、近くで火事があり、酒蔵の樽を一人で運び出したというエピソードもあります。

文政6年（1823）、大坂相撲の大関まで昇進、天保11年（1840）には江戸相撲で横綱の免許を与えられました。江戸城内で将軍徳川家慶の上覧相撲が催され、この時の土俵入り（不知火型）を描いた錦絵が残されています。体格は身長約175㎝、体重約135kgという当時としては堂々たるものであったようです。

嘉永7年（1854）に54歳で他界、墓は故郷である栗崎町の小高い丘の中腹にひっそりと立っています。

轟貝塚 宇土市指定史跡

縄文時代前期（約6000年前）を代表する貝塚

当貝塚は轟式土器の標式遺跡（時期区分の基準となる遺構、遺物が検出された遺跡のこと）として著名な貝塚です。

正確な範囲はわかっておらず、現地表面から採取される貝片は粉々に砕けたものがほとんどで、土器片についても同様です。

轟貝塚を含め、周辺の土地利用は、古くは縄文時代早期にまでさかのぼることができます。その他の縄文時代では、前期、中期、後期前半に断続的に生活の痕跡が認められます。縄文時代以後も、弥生、古墳時代、さらに古代、中世においても遺物、遺構が認められ、長い間利用されてきたことがわかります。轟水源が近接していることも、遺跡が連綿と続くことに少なからず影響していると想像できます。

椿原（つばわら）古墳 宇土市指定史跡

古墳時代終末期の古墳

発見当時、墳丘の盛土はかなり流失・削平されており、主体部の横穴式石室も玄門部の天井石が露出した状態でしたが、周溝や列石の状況から方墳であることが確認されました。

副葬品は多くの須恵器（すえき）や土師器（はじき）、鉄器などが石室や周溝、墓道から出土しました。羨道部（せんどうぶ）床面から出土した刀子（とうす）1点を除き、大半は元の位置をとどめておらず、古墳の破壊などに伴う流れ込みと推定されます。

本古墳の築造年代は、7世紀の初め頃と考えられ、7世紀前半代を通じて追葬や祭祀行為が行われたと考えられます。

当古墳の特色として最も重要と考えられることは、方墳を採用している点です。熊本県内における方墳は、後・終末期古墳では椿原古墳が唯一の事例であり、その他の点からも熊本県下の古墳時代終末期を語るうえで極めて重要な古墳です。

轟水源・轟泉（ごうせん）水道 宇土市指定史跡

日本名水百選・現存する日本最古の水道

大岳系山地東麓から湧き出す轟水源は、毎分4200リットルの湧水量があり、豊かでおいしい水を人々に提供しています。古くから名水として知られ、『肥後国誌』では肥後国三轟水の第1にあげられ「清冽の寒泉」と記されています。昭和60年（1985）には、環境省選定「日本名水百選」に選ばれました。

轟水源は、江戸時代に造られた上水道である轟泉水道の水源で、その水道取水のため、泉の下流を堰き止め、約150平方メートルの貯水池が造られています。

宇土町の水は飲用水に適しなかったため、寛文3年（1663）宇土藩初代藩主細川行孝の時、松橋焼の陶管を使った水道管を造り、轟水源から約3キロメートル離れた宇土の町中まで飲用水を引きました。

それから100年程経つと水道管の破損箇所から雨水が入り込み、水道水の濁りや水漏れが目立ってきたため、宇土藩5代藩主細川興文（おきのり）の時、馬門石をくりぬいた水道管に替える全面改修が行われました。

行孝の代に建設され、興文の代に改修された轟泉水道は、人々に飲用水をもたらしただけでなく、田畑の灌漑用水としても用いられました。現在も使われているこの水道は、使用中の上水道としては日本最古といわれ、今でも100戸ほどの家庭の飲料水として使用されています。

轟水源地及び樋管として宇土市の史跡に指定されています。

轟泉水道のルート

取水口
この水門から樋管を通し、宇土市街地まで水源の水を導いています。

マスと落し口
（水源より50m）
樋管のコース変更や水のろ過などのため、約90cm四方のマス（貯水槽）を要所に配置しています。また灌漑用水確保のため、水の落し口をつくっています。

水道塘
（水源より2.1Km）
地盤の低い所では石垣を築いた塘（土手）をつくり、樋管を据えています。

最終井戸
（水源より約3km）
船場橋のたもとには、轟泉水道の最終井戸があり、余った水は船場川に排出されます。

轟泉（ごうせん）資料館

開館時間	午前9時～午後5時
入館料	無料
開館日	火曜日,木曜日,日曜日
住所	熊本県宇土市宮庄町
問合せ	宇土市まちづくり推進課（0964-22-1111）

轟御殿にある藩と水道の資料館

轟水源地の上にある轟御殿（宇土細川家の菩提寺跡）には轟泉資料館があり、宇土細川藩関連資料や轟泉水道の資料が展示されています。

細川家墓地（泰雲寺跡） 宇土市指定史跡

宇土細川藩主9人のお墓

慶安年間（1648～1652）、宇土藩初代藩主細川行孝が、元は八代に建立した宗功寺を宇土町南小路（現宇土市門内町）に移し、さらに現在の地に移転して泰雲寺と改称しました。

行孝の父である細川立孝の供養のために建てたもので、宗功寺も泰雲寺も立孝の法名「泰雲院殿宗功立允大居士」からとったものです。以来細川氏歴代の菩提所として同家の支配下に入りました。藩主の墓地は泰雲寺跡にあります。

明治3年（1870）8月に廃寺となり、泰雲寺跡には新たに神道の原泉社を建て、細川氏歴代の霊を祀っています。

如来寺（にょらいじ）と木造如来坐像　熊本県指定有形文化財

道元の直弟子により開寺

創立年代…文永6年（1269）
本尊…釈迦如来、阿弥陀如来、薬師如来

文永6年（1269）、古保里越前守の娘と伝えられる素妙尼に請われ、寒巌義尹（かんがんぎいん）が三日村（現宇土市花園町三日）に三日山如来寺を開きました。永正1年（1504）に上古閑村（現宇土市岩古曽町）に移転し、現在は岩古曽町に所在します。

当寺が焼けた際、本尊の釈迦・阿弥陀・薬師三尊坐像と韋駄天像、寒巌禅師像の他7軀の仏像が厄を逃れ、今日まで受け継がれています。これらの諸仏像から推察すると、三日村にあった頃の如来寺は相当大きな規模の七堂伽藍を配した寺であったと考えられます。

なお、木造阿弥陀如来坐像・木造釈迦如来坐像・木造薬師如来坐像は熊本県有形文化財に指定されています。

如来寺

鎌倉時代の三尊像

如来寺には鎌倉時代の三尊像が安置されています。

釈迦像（中央）は、像高81.8センチ、材質は桜材。寄木造で、眼は彫眼、構造は頭体部を別の材木で造っています。頭部は3つの材、体部は1つの材で造り、像内が円形になるように内部をくり抜き、背面に蓋をするように背板をはめ、胸部には納入部を設けています。

昭和54年（1979）の解体修理の際、胎内胸部から木製球形舎利容器・絹本の梵字・曼荼羅・綿裂などが発見され、木製円形蓋板の銘文より、本像が正元2年（1260）1月に寒巌義尹と尼修寧の発願によって造像されたことがわかりました。

阿弥陀像（左）は、像高75.5センチ、桧材の寄木造。眼は彫眼で、衣の着け方は釈迦像とほぼ同じですが、膝前や側面の衣文の表現が異なっています。

構造は、頭頂から地付まで前後に3材を使って造られていますが、中間の材は幅2センチほどのマチ材のような、像の均衡を取るために入れられたものであり、実質は前後2材製に近い造りです。胎内仏が発見されました。

薬師像（右）は、像高76.2センチ、桧材の寄木造。眼は彫眼で、衣の着け方は阿弥陀如来像に近い表現様式です。像の構造も阿弥陀如来像にほぼ同じです。

明るくゆたかな表情とかるく左手を上げ、薬壺をのせた姿は病める生き物すべてを済世するにふさわしい造型です。

使用している材や構造の違いから釈迦像が先に造像され、その作風にならって阿弥陀像、薬師像が造られたのではないかと考えられています。

晩免（ばんめん）古墳（花園陵墓参考地）　宇土市指定史跡

安徳天皇の陵墓伝説がある

潤野3号墳付近から西北方向に伸びる丘陵裾に残る独立丘の頂上部から家形石棺が発見されました。しかしこの石棺が納められた古墳そのものの規模や範囲などの詳細はわかっていません。おそらくこの独立丘の頂上部分が古墳である可能性が高く、現在石棺が保存されている玉垣で囲まれた部分を中心とした直径約30～35メートルの円墳である可能性があります。

主体部となっている組合せ式家形石棺は、環状縄掛突起と刀掛突起をあわせ持つという珍しいものです。石棺内部の北側に頭骨が2つあったといわれています。

安徳天皇の陵墓という伝説があり、宮内庁により陵墓参考地に指定されています。安徳天皇は、治承2年（1178）、高倉天皇の第一皇子として誕生しました。治承4年（1180）にはわずか2歳で即位しましたが、政治の実権は祖父の平清盛が握りました。

当時、平氏政権に対する反乱が各地で起こっていました。その中で、寿永2年（1183）に木曽義仲が京都へ迫った際、安徳天皇は平宗盛に連れられ京都を出ました。しかし、寿永4年（1185）の壇ノ浦の戦いにおいて、わずか8歳であった安徳天皇は、清盛の妻である時子に抱かれて海に沈み、平氏と命運を共にしました。

しかしながら、この古墳の実際の築造時期は5世紀後半とみられ、「晩免古墳」という名称で宇土市の史跡に指定されています。

宇土の雨乞い大太鼓（大太鼓収蔵館）　熊本県指定重要民俗文化財

雨乞い・虫追いなど村の行事に活躍

すべてケヤキの木をくり抜いた一木造りで、太鼓の両縁には木星（きぼし）と呼ばれる14面体の飾りがつけられており、古いものでは、走潟町平木地区の太鼓に寛文13年（1673）6月2日の銘があります。

太鼓のほとんどは雨乞いや虫追いなどの村の行事のために市内各地区の太鼓小屋において保管されていましたが、これらの行事は戦後次第に衰退し、大太鼓も神社や寺に放置されていたり、朽ち果てていました。しかし、昭和48年（1973）に椿原大太鼓が修復され、活用されるようになったことをきっかけに、他の地区でも大太鼓再興の動きが出てきはじめ、平成元～3年（1989～91）、ふるさと創生事業の一環として皮の張り替えと修復が行われました。

現在、26基の大太鼓が宇土市大太鼓収蔵館に展示されています。収蔵館では、歴史的価値の高いこれら26基の巨大な雨乞い太鼓に触れることが出来、雨乞いに関する民俗資料やビデオなども見学することが出来ます。

開館時間	午前9時～午後4時30分（入館は午後4時まで）	
入館料	個人	大人100円 小・中学生50円
	団体（20人以上）	大人70円 小・中学生30円
休館日	毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は翌日），年末年始	
住所	熊本県宇土市宮庄町406番地の2	
問合せ	宇土市大太鼓収蔵館（0964-22-1930）	

宇土の御獅子舞（おんししまい）　熊本県指定重要無形民俗文化財

細川公が奉納した伝統ある獅子舞

宇土御獅子舞は、雌雄一対（角が2本あるのが雄で1本が雌）、2人立の獅子舞です。

この獅子舞は元文5年（1740）、宇土藩5代藩主細川興文（おきのり）が西岡神宮に獅子舞を奉納したところから始まっており、興文は武運長久や心願の筋のために獅子舞奉納を思い立ったと伝えられています。

舞の型は前段と後段に分かれ、主として前段は山野を馳廻り獅子を捜す玉振りの動作を表し、後段は玉振りと獅子が一体となり楽しく遊ぶ動作を表しています。

舞の種類は楽廻り・春眠（舞の型前段）・おきはな（舞の型後段）・楽の遊び・せくらべ・玉ひろい・合戦・千秋万歳とあります。

西岡神宮　秋の大祭10月19日開催

椿原（つばわら）雨乞い太鼓踊り　宇土市無形民俗文化財

急勾配の石段を上って神社に奉納

椿原地区では、3年に一度、田植えが終わって一段落した7月最後の土日に椿原八幡宮で、雨乞い太鼓奉納が行われます。

面径1.3メートル、胴長2メートル余ある大太鼓を30～40人ほどの男性が担いで、83段もある椿原八幡宮への階段を登ります。

境内では、大太鼓を御輿のように担いで練り歩き、勇壮な"ガブリ"も披露されます。これは太鼓を両側から大きく揺するものです。奉納された太鼓は交替で夜通し叩かれます。

また、太鼓のリズムに笛や鉦をあわせた「雨乞い」や「ねんねこ」と呼ばれる曲も披露され、女性たちの踊りがこれに華を添えます。

使用される大太鼓は、熊本県の有形民俗文化財に指定されており、通常は大太鼓収蔵館に保存・展示されています。

境目（さかいめ）遺跡　宇土市指定史跡

豊富な遺物は弥生時代のもの

当遺跡からは部分的な調査にもかかわらず、環濠と考えられるV字形の溝状遺構、合口式の大型甕棺などの重要な遺構と豊富な遺物が出土しました。遺物の時期も、弥生時代中期前半から後期終末まで途切れないうえ、古墳時代前期まで継続しています。本遺跡のように継続期間の長い遺跡は県下でも稀少であり、特に県内最古の前方後円墳が集中する宇土半島基部に存在することがさらに重要度を高めています。

古代の遺構は未確認ですが、遺物の内容から善導寺遺跡や上松山遺跡も含めて旧宇土郡の中心的な集落跡と考えられ、特に宇土市においては最大の集落跡といえます。あるいは公的施設が存在した可能性も考えられます。

曽畑（そばた）貝塚　宇土市指定史跡

朝鮮半島の影響を受けた縄文土器が出土

朝鮮半島の櫛目文土器の影響を受けた曽畑式土器の標式遺跡（時期区分の基準となる遺構、遺物が検出された遺跡のこと）として有名な貝塚です。

貝塚に隣接した低湿地からは大量のドングリ貯蔵穴群が発見され、これにより貝類の廃棄場所と、食物を貯蔵する場所を明確に区別して利用していることが確認できます。出土した土器等により、縄文時代の貝塚であることがわかりました。貝塚の南側にあたる部分については、水田化のためにほぼ滅失していますが、この両地点周辺には、本来、厚く堆積した貝層が存在しており、貝塚の主体となる部分は、発掘調査が実施される前にすでに失われていました。

他の遺跡では残存しない情報を大量に包含しており、宇土半島基部の貝塚群の1つとして、貝塚そのものの重要度も極めて高いといえます。

楢崎（ならざき）古墳　熊本県指定史跡

五世紀の石棺が見学できる

前方後円墳として県から指定を受けていますが、円墳の可能性もあります。埋葬施設としては、後円部にあたる場所に4基、前方部となる位置に1基あります。以下は埋葬施設を表にまとめたものです。

石棺・土壙の構造・形状はそれぞれ全く異なるものばかりであり、そこには時期差があったとみられます。棺の形状からみて、5世紀中頃に古墳は築造され、以降、5世紀後半から末にかけて営まれたものとみられています。

番号	内　容	備　考
一号	組合せ式家形石棺	人骨2体,直刀2振,鉄鏃(てつぞく)など出土
二号	刳抜(くりぬき)式舟形石棺	刀掛状突起が付く
三号	組合せ式家形石棺	棺の蓋(ふた)の短辺に円柱状縄掛突起が1つ
四号	石蓋土壙(せきがいどこう)	
五号	組合せ式箱形石棺	

向野田（むこうのだ）古墳　宇土市指定史跡　※出土品は国指定重要文化財

古代の女王の墓

前方部を北に向ける全長約86メートルの前方後円墳です。しかし、採土工事によって前方部が失われ、また、後円部墳頂平坦面も削られてしまっています。

古墳の時期は古墳時代前期後半と考えられ、後円部中央の竪穴式石室から、30代後半～40代の女性の人骨が発見されました。

地域首長墓とみられる前方後円墳の埋葬施設から、完全なかたちで人骨が検出されることは非常に珍しく、貴重な発見です。

石棺内からは鏡3面のほか、碧玉製車輪石という腕輪やヒスイ製の勾玉、ガラス小玉などが出土し、石棺外には鉄刀や鉄剣、ヤリ、鉄斧などの武器類が置かれていました。

当古墳の被葬者は女性であることが明らかとなり、女性の地域権力者の存在が確認されました。これは、古墳時代前期社会における首長権力のあり方を考える上で非常に重要な発見であり、当古墳は、熊本県地域だけでなく、日本における古墳時代前期を語る上で欠かせない古墳です。

出土遺物は、「肥後向野田古墳出土品」の名称で国の重要文化財に指定され、宇土市立図書館1階の郷土資料室に展示されています。

宇土市立図書館 郷土資料室

宇土市内各地から出土した発掘資料や歴史資料などを展示しています。特に宇土市松山町所在の向野田古墳の出土品は，国指定の重要文化財であり，4世紀後半頃の豪族の副葬品として著名なものとなっています。また，毎年1～2回程度，宇土市の歴史・文化をテーマに特別展を実施しています。

山王さんまつり（佐野山王祭礼 さのさんのうさいれい）

七百年の歴史ある山王さんまつり

宇土市花園町の佐野山王神社に伝わり、700年の歴史を持つといわれている山王さん祭り（甘酒祭り）は、サルに扮した若者達が集落の山王神社に集い、「ホーライ、ホーライ」の掛け声をあげつつ甘酒の徳利を奪い合い、甘酒を振りかけ合いながら集落内を巡行し、最後に山上で空の徳利を投げ捨てるという祭礼です。

基本的には甘酒の徳利を神霊のこもる容器とみなし、水田の耕作に関わる神霊をヤマへ送る霜月（旧暦11月）の収穫儀礼です。

この祭りは、旧暦の11月の申（さる）の日に行われます。月に3回申の日がある年は中の申、月に2回申の日がある年は最初の申の日となります。

甘酒が振りかかった者は1年間無病息災で過ごせるといわれています。

おつぼつ場・マルメロ場

熊本藩の銘菓「加世以多」の原料

マルメロはおつぼつ・丸メラともいい、秋になると洋梨に似た黄色い果実をつけます。西洋カリンともいい、通常砂糖漬けとして食用にし、熊本藩の銘菓「加世以多（かせいた）」の原料に使われています。

江戸時代、銭塘（ぜんども）手永走潟村（現宇土市走潟町）の緑川の河岸段丘上にかなりの範囲にわたって植えられていたことが、天保6年（1835）頃に描かれた「緑川絵図」によってわかります。献上用の藩御用としてマルメロが最も盛んに栽培されたのが「緑川絵図」に描かれたこの頃であったと思われます。

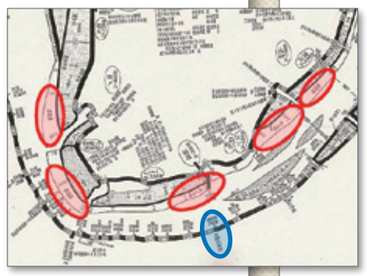
19世紀以降も、走潟でのマルメロは栽培され続け、戦後しばらくまでは走潟に植わっていましたが、最近の聞き取り調査によれば、戦後ブドウ栽培が盛んになって以降、走潟のマルメロの木は切り取られ、その場所はブドウ畑に変わってしまいましたが、今ではそれもなくなっています。

太郎兵衛渡し跡

浜戸川の渡し

太郎兵衛渡し跡は旧緑川（現浜戸川）の下流にあり、民営の渡し舟が1艘ありました。この渡しがいつ頃からあるのかはわかりませんが、天保6～11年（1835～40）のものと推定される絵図には太郎兵衛渡しの名称がみられます。

川や海を渡過するような所を渡し・渡りといい、その渡過方法のうち舟行するものを船渡し・渡し船と呼びます。これは原始・古代より行われ、中世に入ると、諸国の守護・地頭らが私的に津料・河手と称して船賃を徴収し、旅行者の妨げとなることも多くありました。近世に入ってからは本格的な法の整備が行われます。渡賃は、渡船場の高札の規定によりますが、一般に武士・奉公人や近隣諸村の百姓などは無料で、商人や道者・参詣者はその荷物分と共に定額を支払うのが原則でした。



嘉永新川（かえいしんがわ）

江戸時代の大土木工事

緑川の下流、天明町川口字拾町（現熊本市川口町）から平木橋の下を通り、天明町川口字方丈（現熊本市川口町）にほぼ直線的に西下し、有明海河口に至る川で、現在は緑川本流となっています。

旧緑川は、下流部で大きく湾曲しているために、洪水時には緑川の水はけが非常に悪く、大きな被害にみまわれていました。そこで文政9年（1826）から4年間、緑川大普請工事が行われましたが、それでも改善されませんでしたので、その対策として境川ー新川をさらに深めて拡幅し、緑川として西下させ、有明海河口に注ぐというラインが造られました。これが着工時期にちなんで嘉永新川（現緑川）といわれる由縁となっています。

さらに昭和になって緑川洪水防止策として、嘉永新川を緑川本流とすることとなり、嘉永新川の改修が進められました。なお、この川ができたことによって大きく湾曲していた旧緑川は、現在、浜戸川とよばれています。

栗嶋（あわしま）神社のミニ鳥居くぐり

日本一のミニ鳥居で子宝と安産を

創立年代・・・寛永10年（1633）

祭神・・・少彦名神（すくなびこなのかみ）

「栗嶋神社由緒略記」によると、寛永10年（1633）信心深い老夫婦のもとに大変粗末な身なりの旅の僧が訪れ、一夜の宿を乞いました。そこで老夫婦は素朴ながら心からのもてなしをしました。その夜、老妻の夢に神が現われ「我は粟嶋の神なるぞ、信心深き汝等に幸を授けん。」と告げました。

翌日、僧が旅立った後、僧が使用していた枕元に一体のご神体が置かれていました。老夫婦は慌てて僧を追いかけましたが、みつかりませんでした。そこで老妻は昨夜の夢を思い出し、このご神体が粟嶋大明神であると思い、小さな祠を建ててご神体を安置し、朝夕熱心に信仰したそうです。これが粟嶋神社の始まりと伝えられています。

境内の小さな鳥居をくぐると病気平癒、子授け・安産等にご利益があるとされ、特に3月1日～3日の祭礼は大変多くの参拝者で賑わいます。

千体仏（せんたいぶつ） 宇土市指定史跡

空海作との伝説もある彫刻

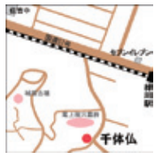
通称「千体仏」は、阿蘇溶結凝灰岩が崖状になり露出したものを多宝塔の形式に作り、その塔の側面に立像の地蔵菩薩像を刻んだものです。

伝説によると、弘法大師（空海）が彫刻したといわれていますが、実際はそれより時代が下った室町時代後期頃の作と考えられます。

像は立像の地蔵菩薩を横に並べて彫刻したもので、像の高さは20センチぐらいです。しかし、姿も定かではないくらい傷んでいるものもあり、1000体もあったといわれる仏像も今では100体そこそこしか数えることができません。長年の風化と樹根の成長により、岩石に亀裂が生じて、仏像の部分が落下するなどしており、現在ではその一部を残しているだけです。

このそばに湧き出しているのが「千体仏の水」。

水の質はよく、生活用水、また田畑のかんがい用水として長いこと利用されてきました。肥後名水百選に選ばれています。



天神山古墳（てんじんやま） 宇土市指定史跡

県下最大規模の前方後円墳

墳形は前方後円墳で、前方部を東側に向けています。墳丘斜面には人頭大の自然礫（しぜんれき）や角礫（かくれき）がみられることから、葺石を有していると考えられます。埴輪の存在は確認されていません。

埋葬施設に関する情報はなく、遺物も未確認です。後円部から西側に約10メートル離れた場所から土器片2点が検出されていますが、古墳に伴うものであるのかどうか不明です。古墳の時期は今から約1550年前の古墳時代前期後半と推定されています。

当古墳周辺には同じ古墳時代前期に属する古墳が存在しておらず、現状では天神山古墳のみが単独で存在する状況です。

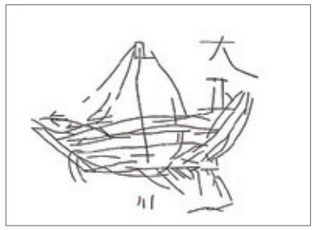
仮又（かりまた）古墳 熊本県指定史跡

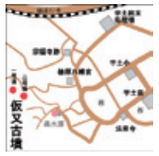
舟の線刻がある装飾古墳

墳丘は推定で東西12メートル、南北14メートルのいびつな円形をなすものと考えられます。内部主体は横穴式石室です。

本古墳の一番の特色は、装飾古墳であるということです。舟の線刻は宇土半島に特に集中してみられるものであり、当時の有力者層の生業や基盤等を知ることができ、当時の海運技術や舟の構造を知るうえでも貴重な遺跡です。その他副葬品の鉄滓（てっさい）・外部列石の存在など、北部九州との関連がうかがえ、水運を用いたであろう被葬者の行動範囲の広さが推測できます。

また、当古墳にみられるような石室は、7世紀中葉頃に存続していることが判明しているので、古墳時代終末期古墳の石室構造の変遷を知るうえでも貴重な資料です。





住吉自然公園

名にしおはば あだにぞあるべきたはれ島
浪のぬれぎぬ 着るといふなり（伊勢物語）

風流島（たはれじま・たばこじま）

古代肥後の玄関口であった

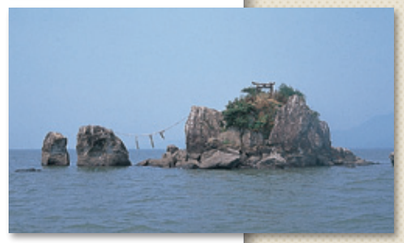
枕草子や伊勢物語に出てくる島であり、古代から著名な島だったようです。波による侵食はほとんど受けておらず、昔のままの大きさと思われます。

頂上には高さ1．3メートル、幅1．1メートルの小さな鳥居が建ち、正面（北側）には「住吉神社」と書かれています。

1000年も前に地方の岩礁がなぜ都に知られていたのかについては、当時の交通手段がほとんど舟であったことを考えれば、熊本に入る玄関口である緑川河口の近くに位置するたわれ島が知られたのは自然なことといえます。

枕草子を書いた清少納言の父親は肥後国司として中央から派遣されていた人物であり、このことは伊勢物語にもいえます。在原業平の義父である紀有常は肥後権守であり、従兄弟の在原安貞も肥後国司に任ぜられていました。

枕草子：島は八十島。浮島。たはれ島。絵島（後略）



住吉神社と住吉灯台

スタジイ林は環境省指定

住吉神社

1071年（延久3）、肥後国司・菊池則隆が海上安全の祈願所として、大阪の住吉神社の分霊を祀ったのが始まりといわれています。

【住吉灯台の由来】

住吉灯台は、肥後細川藩4代藩主細川宣紀が江戸参勤の為山口県周防灘を航海中に暴風雨に逢い、住吉神社を遥拝して難を免れたお礼に、享保9年（1724）この地に高灯籠を寄進したのが始まりといわれております。

灯台がある小高い山頂の住吉神社は、肥後の国司であった菊池則隆が海上安全の祈願所として、摂津住吉宮に詣でて大神の分霊を奉り建立されました。有明海から緑川を通り熊本に入る上での玄関口として、この地は海上航路の要衝であったことが偲ばれます。

小部田横穴墓群（こべたよこあなぼぐん） 宇土市指定史跡

宇土半島では数少ない横穴墓群

1号横穴墓と7号横穴墓以外の横穴墓は改変が著しく、玄室規模などを明らかにはできません。調査で遺物が検出されなかったため、群形成の時期などは不明ですが、7世紀前半頃の土器が採集されていることから、少なくともこの時期まで横穴墓の築造もしくは追葬が行われたことがわかります。

宇土半島において数少ない横穴墓群のひとつです。本地域では、横穴式石室を主体とする中小規模の円墳が散在的に分布し、密集状態で築造された小円墳や横穴墓などの、いわゆる群集墳の形成が極めて希薄です。本地域における古墳時代後期・終末期古墳文化の特色として重要です。

野鶴町伊津野の板碑（のづるまちいづののいたび）

地域の歴史を語る石碑

現在の野鶴町伊津野地区には16世紀の石造物が多く存在しています。

中世の干潟から台地上の伊津野集落への登り口、つまり干潟に面した村の入口の壁面の大石は、永正18年（1521）8月26日に有明海を襲った台風が高潮を引き起こしたとき、大石が高潮によって洗われ、村の入口に姿を現したというものです。そこにはその経緯とたくさんの法名が刻まれています。

おそらく高潮は伊津野村の多くの人々の命を奪ったと思われます。大災害による痛ましい犠牲者を供養する法会を共同で執行し、その事実を永遠に忘れまいと誓った人々は、伊津野村の百姓とその家族と考えられ、戦国期宇土地域における村共同体の存在と百姓の生きた声を伝える、極めて貴重で、全国的にみても珍しい文化財であり、歴史資料です。

ドゥルー女史記念碑

海苔養殖の技術を向上させた

イギリスの海藻学者として著名だったドゥルー女史は「ノリは、夏の間、糸状体で過ごす」ことを発見し、親交があった九州大学教授の瀬川宗吉に手紙と論文を送りました。そのことを瀬川から聞いた熊本県水産試験場技師の太田扶桑男が、ノリの人工採苗の研究を続け、昭和28年（1953）10月、遂に成功しました。

人工採苗によってノリの養殖技術は飛躍的に進歩し、宇土はもちろん、全国のノリ漁民に大きな恩恵をもたらしました。そのため、人工採苗を可能にしたドゥルー女史の功績を讃えて、昭和38年（1963）4月14日に当石碑が建立されました。以来、毎年4月14日には記念碑の前にノリ関係者が集まり「ドゥルー祭」が開催されています。

紫陽花マンドリンコンサート

約二千株紫陽花の名所

あじさい花見（住吉自然公園）
6月中旬～下旬

季節になると約二千株の紫陽花が咲く自然公園です。

また、公園からは有明海が一望でき、金峰山や雲仙普賢岳も眺望できます。

紫陽花マンドリンコンサート（住吉自然公園）

住吉自然公園で6月中旬に開催される花と音のイベントです。ちょうど満開のアジサイに囲まれた会場では、オリジナル曲「あじさいの歌」などが演奏され初夏の風物詩となっています。

あじさいの湯

ゆったりできる公営温泉

のどかな田園風景の中のアジサイの湯。美しく咲き誇る緋寒桜、アジサイの花に目を楽しませながらやわらかな感触の温泉はさっぱりと、しっとりと、体と心をときほぐしてくれるよう。100％天然温泉。アルカリ性単純温泉で大浴場、サウナ、リフレッシュルームなども完備。

○営業時間
午前10時～午後9時
○休館日
第1・第3月曜日／12月31日／1月1日

長部田海床路（ながべたかいしょうろ）

不思議な風景

TVのCMで、一躍観光スポットとして注目されました。

干満の差が激しい海で海苔養殖・採貝を営む漁業者のために昭和54年に建設されました。潮の干満の差によって、海の中に電柱が立ち並ぶ光景は、干潮の2時間前後が見頃です。隣の長浜漁港にも2つの海床路があります。

網津（あみつ）の里山

美しい自然が残る

〝あじさいの湯〟から網津川の上流に行くと懐かしい里山の風景が見えてきます。清流ならではの芹（クレソン）が自生する川、段々の棚田、天草からの参勤交代用に架けられた眼鏡橋など、歴史と自然の残る里山の散策をお楽しみください。

馬門石（まかどいし）

馬門石・石切場跡

馬門石・石切場跡（まかどいし・いしきりばあと）

今から約9万年前、阿蘇山の大爆発で流れ出た火砕流が冷えて固まって出来た阿蘇溶結凝灰岩のうち、宇土市網津地区馬門付近に産するものを馬門石と呼んでいます。

宇土市網津町・網引町は、中世には利用が減少するものの、古墳時代から現代に至るまで連綿と採掘されてきた馬門石（阿蘇溶結凝灰岩）の産地です。なかでも、ピンク色の色調を帯びたものに特徴があり、古墳時代には瀬戸内から畿内にかけての特に有力な権力者の棺に用いられたほか、江戸時代には藩の御用石となり、改修された轟泉水道の石製の樋管などに使われました。

馬門石切丁場跡は網津川左岸に所在しています。灰黒色とピンク色の馬門石が主要な色調で、一部にベージュ色やオレンジ色の露頭も存在します。

野添石切丁場跡は網津川右岸の野添山南側から西側山麓に位置します。灰黒色と灰白色の馬門石が野添山南西側山麓を中心に分布します。

清辻石切丁場跡も野添石切丁場跡と同様に灰黒色や灰白色の馬門石が主体ですが、一部にピンク色の馬門石も分布します。

これらの石切丁場をまとめて馬門石石切場跡といいます。

【古墳時代】

宇土半島周辺で馬門石を使用した古墳として最も古いのは、5世紀前半の長砂連古墳の石質材です。以後、ヤンボシ塚古墳、鴨籠古墳、井寺古墳等で使用されました。同じ頃、岡山県吉備地方の造山古墳に灰黒色の馬門石製の石棺が運ばれています。5世紀末から6世紀前半になるとピンク色やベージュ色の馬門石が大阪府峯ケ塚古墳・長持山古墳等の河内・大和・摂津の天皇や、それを支えた有力豪族の棺に用いられました。また、継体大王（天皇）陵と考えられている大阪府高槻市今城塚古墳、滋賀県野洲市円山古墳、甲山古墳にも運ばれましたが、これらの古墳に運ばれた時期は地元でピンク石は全く使われていません。これは近畿地方の有力豪族専門の石として用いられたためと考えられます。

6世紀後半になると、椿原古墳や梅崎古墳、城塚古墳、御殿山古墳等の宇土半島基部の古墳で以前と同じようにピンク色の馬門石が使われるようになりました。

6世紀末頃、再び馬門石の石棺が近畿地方へ運ばれ、推古女帝とその子竹田皇子が合葬されたとみられる奈良県植山古墳から馬門石製の石棺が完全な形で見つかりました。また推古女帝の甥・聖徳太子ゆかりの大阪市四天王寺南大門正面に、馬門石の「礼拝石」が置かれているなど、宇土と推古女帝との関係が注目されています。

【鎌倉・室町時代】

さかんに使用されていた古墳時代から一転、大型の馬門石製品は造られなくなりました。13世紀中頃の鎌倉時代の浄土宗寺院（宇土市西光院）に建長2年（1252）銘の五輪塔が確認されており、室町時代にかけても供養塔や墓石に使われました。熊本市御幸木部遺跡、宇城市松橋町長傳寺跡から五輪塔・宝篋印塔が発見されていますが、石塔（墓石）が主で、その発見例も多くありません。

【江戸時代】

馬門石の2期目の最盛期。轟泉水道の大改修で大量に馬門石が採掘されて以降、肥後細川藩の管理下におかれ、熊本平野周辺・宇土・玉名地方で橋や井樋（水門）・鳥居・祠などの公共施設に使われました。この石を監督する役人「赤石場見締役」を置き、1816年から1843年までは、中園英之助（肥後細川藩御山支配役）がその役職を務めていました。

【明治以降】

廃藩によって、馬門の石工衆は藩の保護を失い、自立の道を歩むことになりました。明治17年（1884）に石工職5戸、赤板石3500枚を出荷した記録が残っています。公共物の祠・記念碑・石柱だけでなく、私的な施設にも使用されるようになりました。流し、下水溝、石畳、炉、個人井戸など多様です。昭和35年頃までは、盛んに採掘されていましたが、コンクリートブロックの出現により次第に衰退していきました。

大王のひつぎ実験航海（宇土マリーナに展示）

今から千五百年前、馬門石で造った石棺が近畿地方まで運ばれ、その石棺に納められた人物が、当時の大王クラスの有力者であることが、近年明らかになってきました。近畿と宇土との関係がクローズアップされ、歴史の世界に新たな謎を呼んでいます。

長持山古墳
5世紀後半
直径約20mの円墳。2号石棺（写真左）は舟形石棺で蓋は黒灰色の凝灰岩,身には馬門石を使用。畿内でも馬門石製石棺としては古い時期に属する。

植山古墳
6世紀末
東西40×南北27mの方形墳。西石室が継体大王の孫である推古女帝,東石室は子の竹田皇子で,それぞれ馬門石製の家形・石棺に葬られた。皇子の石棺は,完全な形で見つかったが,女帝の棺は大阪府太子町へ改葬された。

甲山古墳
6世紀前半
琵琶湖の東に位置する直径34mの円墳。横穴式石室に大きな馬門石を刳り抜いた家形石棺が納められている。

椿原古墳
発見当時,墳丘の盛土はかなり流失・削平されており,主体部の横穴式石室も玄門部の天井石が露出した状態でしたが,周溝や列石の状況から方墳であることが確認されました。
副葬品は多くの須恵器（すえき）や土師器（はじき）,鉄器などが石室や周溝,墓道から出土しました。羨道部（せんどうぶ）床面直上で出土した刀子（とうす）1点を除き,大半は元の位置をとどめておらず,古墳の破壊などに伴う流れ込みと推定されます。
本古墳の築造年代は,7世紀の初め頃と考えられ,7世紀前半代を通じて追葬や祭祀行為が行われたと考えられます。
当古墳の特色として最も重要と考えられることは,方墳を採用している点です。熊本県内における方墳は,後・終末期古墳では椿原古墳が唯一の事例であり,その他の点からも熊本県下の古墳時代終末期を語るうえで極めて重要な古墳です。

古代船「海王」と丸太船「有明」

古墳時代の石棺は船を使って運ばれたに違いありません。そのことを検証するために石棺を復元し、大阪まで船で運ぶ壮大なプロジェクトが2005年に実施されました。

2005年7月24日に宇土マリーナを出航。1ヶ月余りの航海を経て、8月26日に目的地の大阪南港（大阪市）に到着しました。現在、海王や石棺などは宇土マリーナに展示されています。

石棺と修羅

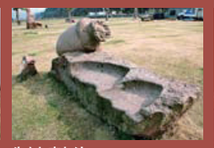
馬門石で復元された重さ約6．7トンの石棺と、それを運ぶ木ゾリの修羅

国際彫刻シンポジウム

太古の夢　本田貴侶（日本）
2004年10月　中央公園

宇土市では、国内外の彫刻家を招へいして、馬門石彫刻の公開制作を実施。馬門石を素材にした巨大モニュメントを制作しました。作品はパブリックアートとして市民の憩いの場に設置され、馬門石を通して宇土市の芸術文化を世界に発信しています。

太陽の塔　ヨオ・クレイ（ドイツ）
2003年8月　宇土マリーナ



生まれ変わり　テール・ラダッツ（アメリカ）
2003年8月　宇土マリーナ

朝陽のために
佐藤淳一（日本）
2003年8月
宇土マリーナ

ロンダ
本田貴侶（日本）
2003年8月　宇土マリーナ

スピリッツ
クリスティーヌ・メイディス（フランス）
2004年10月　宇土市民会館

大王のひつぎ
高濱英俊（日本）
2004年7月　宇土マリーナ

御輿来（おこしき）海岸

御輿来（おこしき）海岸（網田海岸一帯） 宇土市指定名勝

景行天皇が御輿（みこし）をとめて観入られた

赤瀬町、下網田町の網田海岸一帯は、砂岩と泥岩の岩相が交互に洗濯板状となる岩盤と遠浅の海浜にできる砂紋が特徴です。

有明海は全国でも満潮・干潮の差が大きいことで知られ、干潮時には砂浜に波の形のような大きな曲線模様が現れます。この紋様が夕日に照らされる光景は美しく、多くの人に親しまれています。

網田海岸は別名御輿来海岸といわれており、景行天皇が熊襲（くまそ／南九州地域の族名）を平定したその帰り道、風や波に洗われて出来た珍しい大きな岩が一帯にあり、あまりの珍しさにしばらく御輿をとめたので、この海岸がおこしきと呼ばれるようになったと伝えられています。

明治17年（1884）に道路が出来たために岩の大半が削られ、さらに明治32年（1899）に鉄道が出来たため、大きな岩はほとんど無くなり現在のような景観となりましたが、それでもまだ往時の姿をしのぶことができます。

網田（おうだ）神社

愛らしい仁王さん像がお出迎え

網田神社は、阿蘇神社系の「農業神社」です。

近衛天皇の天養元年（1144）9月に菊池経直と宇治友孝（阿蘇大宮司）の協議により、下網田の木藤三に社殿を建立し、祭神として建磐龍命・阿蘇津比咩命・速瓶玉命・神武天皇・菊池経隆公を祀り、附近一帯の田畑を社領としました。しかし、何故か明暦2年（1656）に現在地へ遷宮されています。

鳥居から本殿に向かって右側にあるのが「日の宮」、左側にあるのが「雨の宮」、また、護国堂（右手前）は昭和15年4月に建立され、西南の役から太平洋戦争（戦病者）までの280余柱を合祀してあります。その手前の小さな堂は「太子堂」で昭和25年9月に建立されたものであり、祭神は「聖徳太子」です。

網田（おうだ）駅

県内最古の木造駅舎

1899（明治32）年開業。熊本県内で最も古い木造駅舎です。

三角線の中程にあるこの駅は、蒸気機関車の給水場が設けられ、機関士たちが一服する場でもありました。

白鹿（びゃくらく）神社

境内には肥後名水百選の湧水も

『肥後国誌』によると、当社は白鹿を祟め祀っており、寛治2年（1088）に菊池武章が造立したとあります。しかし菊池武章という人物は系図にはみえず、菊池則隆の子経隆の代の人であるという注釈がありました。

境内には火砕流堆積物の下から湧出し、池を作っている湧水があり、肥後名水百選に選ばれています。網津川支流・白鹿川の源流で、この湧泉から流れ出た水は網津川となり、北流して有明海に注ぎます。

祭神の天御中主神は、古くから信仰された神ではなく、『古事記』『日本書紀』神話形成のかなり新しい段階で、諸物生成の神であるムスビ2神とあわせて数を3に整えるために作られた神で、現在この神を祭る神社は、北辰社・妙見社が明治以降祭神をこの神に改めたものです。

網津川眼鏡橋群 宇土市指定有形文化財

江戸時代末期のアーチ式橋

江戸時代末に造られたアーチ式の眼鏡橋群で、5基が現存しています。

架橋当時の姿は残っていないものもありますが、今も地元の人の生活には欠かせない橋となっています。

本網津橋
平成10年（1998）4月に新橋架設のために解体され、石材は宇土市教育委員会で保管しています。

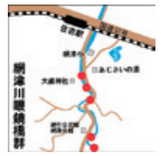
馬門橋
道路舗装により上部が舗装され、欄干もありませんが、アーチ部分に眼鏡橋の姿が残っています。

馬立橋
道路舗装と県道拡張により欄干が撤去され、上部が舗装されています。アーチ部分もセメントで覆われて眼鏡橋の姿はありません。

網引橋
道路拡張のため上部が舗装されています。

タカフネ橋
道路拡張により舗装され欄干もありません。アーチ部分に眼鏡橋の石材（馬門石）がみられます。

猪伏橋
ほぼ原形をとどめています。



牧（まき）神社

牧場の守り神

永承年間（今から950年頃前）建立されたといわれる神社です。この神社の近くには古くから馬を飼育する牧場が存在し、その牧場の守護神としてこの神社がつくられたと考えられます。現在、当時の建物は残っていませんが、文化4年（1807年）につくられた馬門石製の鳥居が建っています。この神社の銀杏は、市の天然記念物に指定されています。

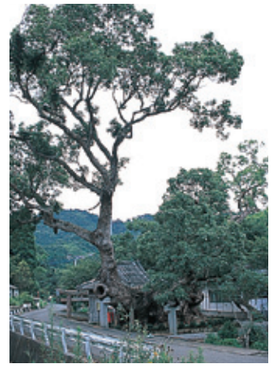
歳の神（としのかみ）の楠 宇土市指定天然記念物

幹囲14メートルの大クス

宇土市網津町馬門の大歳神社にあるクスノキです。

幹囲は14メートルにも及び、宇土市の樹木の中では最も巨大です。

昭和45年（1970）当時は中央にあった枝が枯れたためか、大穴が開き、どの枝（5本）も斜上し、オオイタビが下がって異形をなしていたという記録があります。その後樹勢が衰え始め、平成9年（1997）にはオオイタビの除去が行われ、翌年には各大枝に支柱が設置されました。現在は以前よりも樹勢は回復しかけているものの、主幹部分を中心に傷みが激しく、また主幹から伸びた5本の大枝の枝先も枯死した部分が目立ち、若い枝が少ないため、依然として油断できない状況にあります。



網田焼の里

網田焼の里資料館

幻の肥後細川藩御用やきもの

網田焼は熊本城下の細工町別当忠助が天草の高浜焼に従事していた山道喜右衛門らを招き、寛政4年（1792）に開窯を願い出て、翌年から焼成を始めたとされています。事実上、藩営の窯としてスタートしており、初期は繊細で質の高い作品が多く、肥後細川藩の保護のもと幕府や大名への贈り物として焼かれていました。

しかし、30年ほどで細川藩の保護が打ち切られると、作品の質は徐々に低下し、昭和7年（1932）には生産が中止されました。

現在、網田焼の陶工の監督を務めていた中園家の居宅が修復・整備されて公開されており、併設された土蔵づくりの展示室には、江戸時代からの網田焼の作品をはじめ、網田焼に関する様々な資料が展示されています。

開館時間	午前9時～午後4時30分	
入館料	個人	大人200円 小・中学生100円
	団体（20人以上）	大人160円 小・中学生80円
開館日	土曜日、日曜日、祝祭日 （年末年始12月29日～1月3日を除く）	
住所	熊本県宇土市上網田町787	
問合せ	網田焼の里資料館 （0964-27-1627）	

中園邸　宇土市指定有形文化財

宇土郡の御山支配役の居宅

中園邸は、江戸時代に宇土郡の御山支配役を務めていた中園家の居宅です。建築年代は、六代目英之介の時代のもので、当時の絵図が残されており、天保3年（1833）であることがわかります。

平面は6間取形式で東側に土間、釜屋を取り、西側に6部屋が設けられています。6部屋のうち、最も重要な部屋は10畳の座敷であり、床、棚、付書院を備え、南から西に縁が設けられて、庭に面しています。この座敷の西に接して次の間が見られ、南に玄関が設けられていました。このように中園邸の座敷と次の間は接客のためのもので、茶の間、台所、北側の2部屋が家族のための部屋でした。

当邸は接客を前提に作られていますが、これは当時の中園家の役職と関係するものであり、一般的な庄屋住宅と共通しています。

網田焼窯跡　熊本県指定史跡

江戸時代ののぼり窯

網田焼は熊本城下の細工町別当忠助が天草の山道喜右衛門らを招き、寛政4年（1792）に開窯を願い出て、翌年から焼成を始めたとされています。

網田焼は熊本藩の保護政策もあり、順調に成長を続け、寛政10年（1798）には藩窯（はんよう）となりました。

しかしその繁栄も長くは続かず、藩窯となって30年後には民窯にもどり、作品の質は徐々に低下していきました。一時は8基あったという窯もしだいに衰退していき、昭和のはじめを最後に作られなくなりました。

現在も残っている窯跡は「長尾新家窯」のものです。窯は山の斜面を利用した「のぼり窯」で、熱気を窯全体に平均して回すように設計されていました。

現在、網田焼及び関係資料は網田焼の里資料館に保存・展示しています。

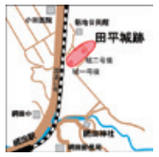
田平城（たびらじょう）跡

網田城と呼ばれていた

田平城の築城年代及び築城者についての記録はありませんが、宇土城の支城（本城を守るように配置された補助的役割を持つ出城・砦・陣屋などのこと）の性格を有していたと思われ、当時は網田城と呼ばれていました。

発掘調査によって16世紀中頃以降の遺物を確認することができました。なかでも、鉄砲玉と共に玉の鋳型がみつかったことは、天正8年（1580）に薩摩の島津氏に攻められたという記録を裏付けるかのような貴重な発見です。

後に名和家（名和顕孝）が豊臣秀吉の命により所領が入れ替えられ、小西行長が肥後南半分を支配すると、田平城は役目を終えて廃城になったと思われます。



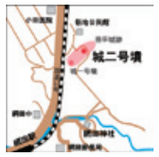
城二号（じょうにごう）墳　宇土市指定史跡

横穴式石室で県内有数の古さ

本来は直径約20～25メートルほどの円墳と考えられますが、田平城跡の一角にあるため、墳丘の改変が著しく明確にはわかっていません。

本墳について最も重要だと考えられるのは、この古墳の石室が著しく古式の様相を備えているということであり、熊本県内だけでなく九州のなかでも最も早い時期に属する横穴式石室のひとつにあげられるという点です。

本古墳は九州、いいかえれば日本に大陸から横穴式石室が導入された4世紀末頃からさほど時間をおかない時期に採用された初期の横穴式石室であり、県内でも有数の古墳のひとつであるということは間違いありません。



ヤンボシ塚古墳　宇土市指定史跡

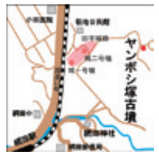
五世紀前半の円墳

直径約25メートルの円墳です。

主体部は横穴式石室ですが、玄室石材の抜き取りをはじめとした玄室上部からの大がかりな破壊を受けており、早い段階に盗掘されたことは間違いありません。

この古墳の特色のひとつに2種類の装飾が施されているということがあります。ひとつは直径12．7センチの円文で、2ヶ所で確認され、もうひとつは細い線刻によって描かれた船です。古墳内部に描かれた船としては日本で最も古いものです。

石室内は盗掘を受けていたので、ほとんど副葬品は残っていませんでしたが、わずかに出土した遺物や石室の構造から考えると、築造時期は5世紀前半代と考えられます。



網田ネーブル

献上品になったワシントンネーブル

昭和40年から平成8年まで天皇家の献上品となった網田ネーブル。

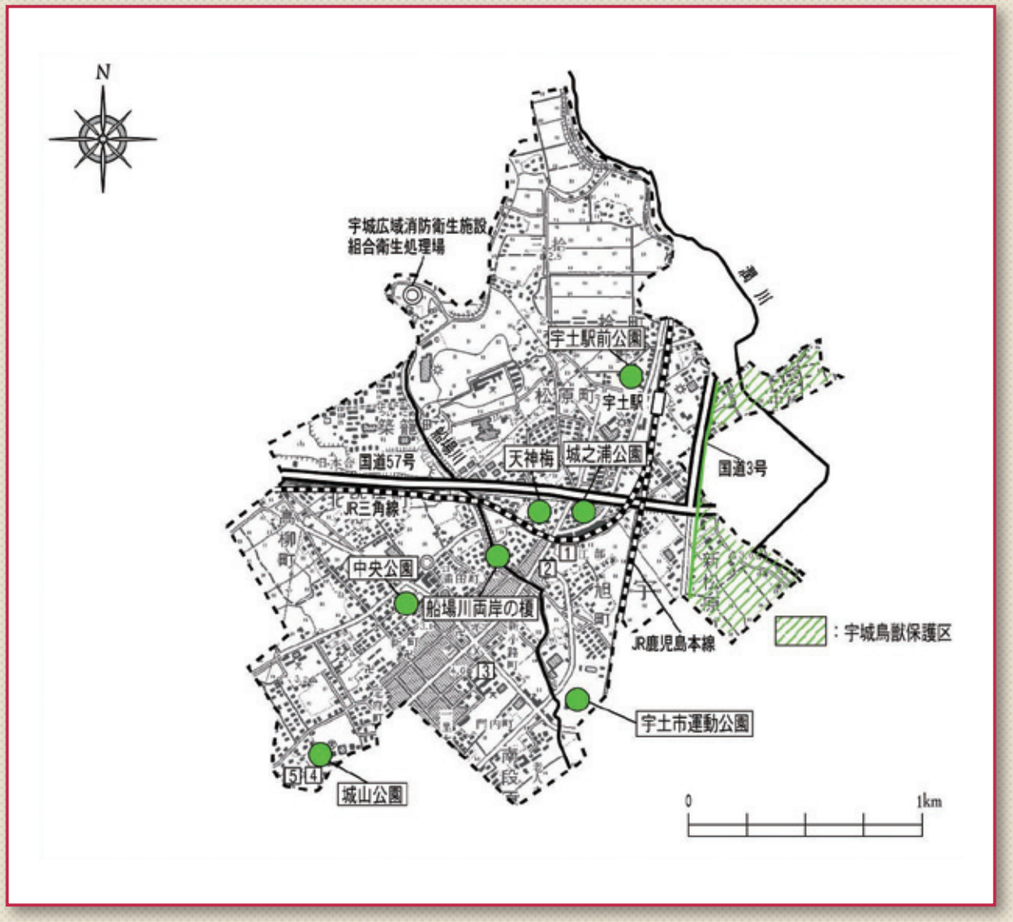
宇土市上網田町は全国のネーブル四大産地のひとつです。

ネーブルは小さな果肉を内蔵したへその意味で種子なしが特長です。

19世紀初めにブラジルのバイア州で、セレクタオレンジの枝変わりとして発生、これをワシントンのアメリカ農務省に送り、1873年カリフォルニア州のオレンジ産業の隆盛の基礎となりました。

1889年日本（和歌山県）に伝わる。

1900年当時の徳久知事が技師を和歌山県に派遣し、柑橘苗をとり寄せ、その中から頂いたワシントンネーブルオレンジ30本、温州蜜柑20本を中園順次氏が網田に植え付けたことから網田ネーブルの歴史が始まりました。



〈動物・植物関連〉
●天神梅［市指定天然記念物］●船場川両岸の榎［市指定天然記念物］　●宇城鳥獣保護区
〈公　園　関　連〉
●宇土駅前公園　●城之浦公園　●中央公園　●宇土市運動公園　●城山公園
〈史　　跡〉
1芭蕉塚　2天草四郎ゆかりの里　3温知館　4宇土城跡（城山）　5草野石瀬・草野蒲川の墓

定府の笹垣（平成7年度第8回くまもと景観賞「緑のある景観」受賞）

定府とは，江戸時代の参勤交代制度において，参勤交代に随行せず，藩邸の管理等を行うため江戸に滞在し続けることを指しています。
定府町一帯は，幕末期に参勤交代が廃止された後，江戸常駐の必要がなくなった藩士達を国許に受け入れるために急遽造成された一画です。造成後，一帯には轟泉水道が引き込まれました。
屋敷の外塀として植えられた笹垣が現在も多く残り，武家屋敷の面影を偲ぶことができます。

景行（けいこう）天皇伝説

地名にまつわる伝説

その昔、熊襲征伐のために景行天皇が九州に来られたとき、網田の干潟の美しさに感嘆し、御輿をとめて風景に見入られたことから、一帯を御輿来海岸と呼ぶようになったと伝えられています。
網田地区には他にも景行天皇伝説にまつわる地名が残っており、「引の花（ひきのはな）」は、道の両側でたくさんの蛙が鼻をならべて天皇の一行を歓迎したことから、「笠瓜（かさうり）」は、山仕事をしていた娘が笠に瓜をのせて天皇に差し出したことからついた地名だといわれています。
『古事記』『日本書紀』に記される第12代天皇で垂仁天皇の第三皇子、日本武尊（やまとたけるのみこと）の父。在位は71年～130年とされます。

長福寺跡薬師堂（ちょうふくじあとやくしどう）　宇土市指定史跡

鎌倉時代の寺跡

創立年代・・・鎌倉時代か？
本尊・・・薬師如来
薬師堂は雄岳の中腹にあります。ここには元徳3年（1331）の墨書銘のある薬師如来1躯、銘文のない薬師如来1躯及び十二神将（大半は失われています）が安置されています。現在、薬師堂がある寺域内には、鎌倉時代の特徴を有するおびただしい数の五輪塔があり、市内では珍しいものです。
かつてあった本尊の薬師如来像の銘文によると、元徳2年（1330）閏6月以来、疱瘡（ほうそう／天然痘の俗称）が流行ったのでこれをなくすために3尺（約91センチ）の薬師如来像を造立・供養したらしいことがわかります。廃寺となり長い年月が経過していたことから、寺の名前は不明でしたが、薬師如来の胎内銘の発見により、長福寺の名称が明らかになりました。

赤瀬（あかせ）オハツキイチョウ　宇土市指定天然記念物

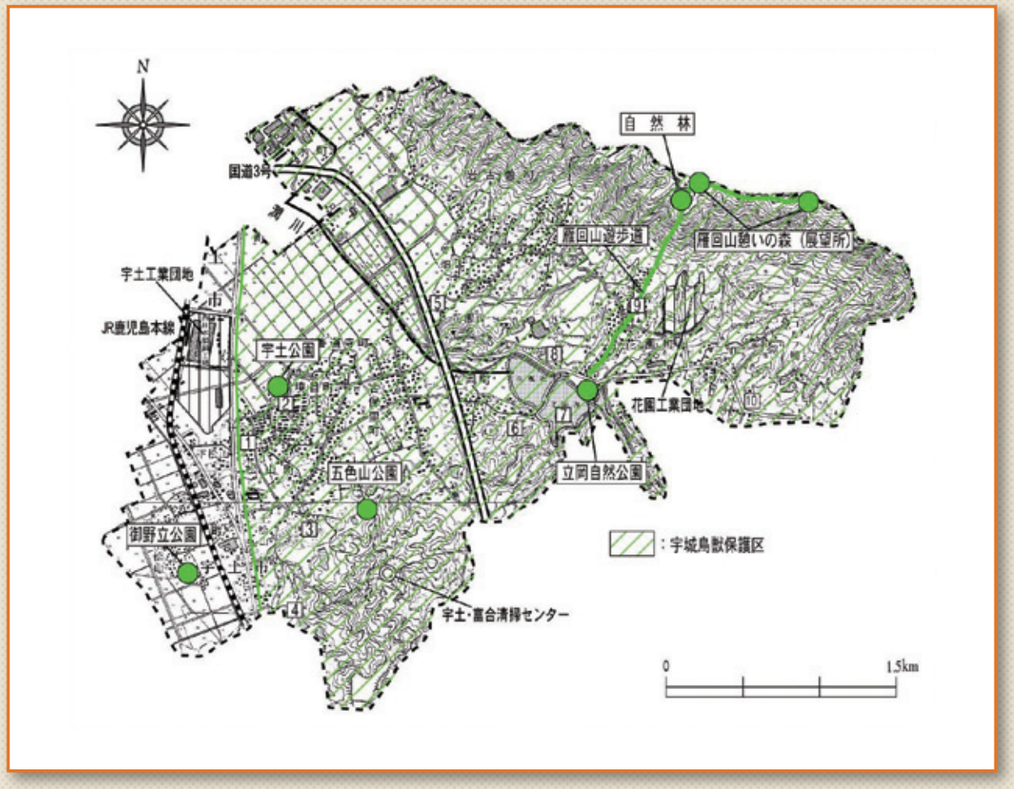
九州に一本しかない

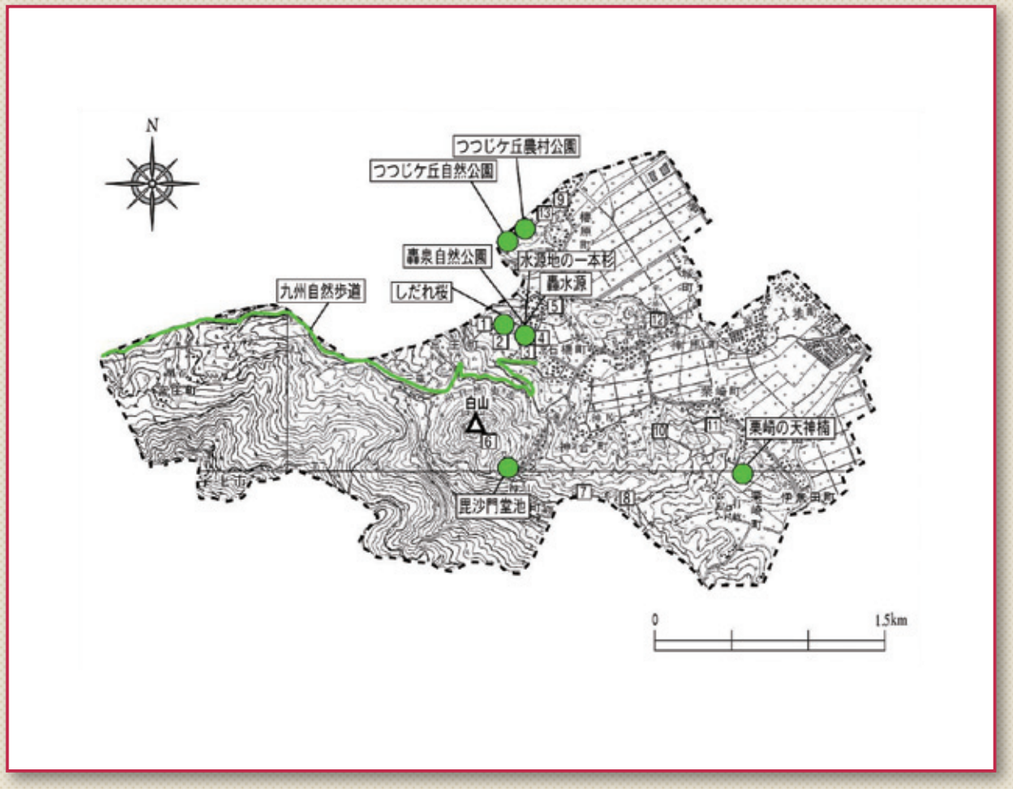
赤瀬観音堂には3本のイチョウの老樹があります。その中で1番大きい株がオハツキイチョウで、実（銀杏）と葉が一緒に付く全国的にも珍しいイチョウです。
このイチョウの株は樹齢約100～150年と考えられ、幹囲3．8メートル、幹は御堂に向かって傾斜し、主幹は明瞭でなく、樹形はあまり整然としていません。
木には地上3メートル以上のところに気根が数個みられますが、いずれも短いもので、他所のような長い気根はみられません。土地の人はこれを乳と呼び、気根の皮を煎じて飲めばお乳の出がよくなるという言い伝えがあるため、切り取ったり、皮を削り取ったりした跡が多くみられます。

寛政（かんせい）の津波供養碑　宇土市指定史跡

1792年島原大変

熊本県の災害碑のなかで、同一の災害による碑の建立数が群を抜いて多いものは、寛政の大津波による供養塔や記念碑で、熊本県内で74基確認できます。寛政4年（1792）に生じた普賢岳の火山活動により前山（眉山）が崩壊し、それにより引き起こされた大津波被害は有明海沿岸に甚大な被害をもたらしました。
犠牲者の数はおよそ肥前で1万人、肥後で5000人を数えました。『寛政四年四月朔日高波記』によると、宇土郡の合計死者数は1266人であり、大きな被害を被ったことがわかります。
この塔は、被害の大きかった玉名郡、飽託郡、宇土郡の3ヶ所に同種の供養塔が造立されたことにより、別名「一郡一基の塔」と呼ばれています。





〈動物・植物関連〉
- ●自然林（ミミズバイ―スダジイ群集）
- ●宇城鳥獣保護区

〈公　園　関　連〉
●宇土公園　●御野立公園　●五色山公園　●立岡自然公園　●雁回山憩いの森　●雁回山遊歩道

〈史　　跡〉
[1]明治天皇御野立所跡　[2]境目西原遺跡　[3]寺尾勝信の墓　[4]向野田古墳　[5]曽畑貝塚
[6]晩免古墳　[7]立岡公園一帯　[8]楢崎古墳　[9]安国寺跡　[10]如来寺遺跡

立岡自然公園

県下桜の名所としても名高く，シーズンは県下から多くの花見客で賑わいます。立岡池が130,336㎡，花園池が91,438㎡にも及びます。立岡池は慶長16年（1611年）加藤清正の築造といわれ，一方花園池は幕末の安政2年（1855年）に造られたといわれます。

〈動物・植物関連〉
- ●栗崎の天神楠［県指定天然記念物］　●しだれ桜［市指定天然記念物］
- ●水源地の一本杉［熊本県選定ふるさと熊本の樹木］（台風で倒木）

〈自　然　環　境〉
- ●轟水源［環境省・熊本県選定名水百選，環境省選定自然景観資源］
- ●毘沙門堂池［熊本県選定名水百選］

〈公　園　関　連〉
●つつじヶ丘農村公園　●つつじヶ丘自然公園　●轟泉自然公園　●九州自然歩道

〈史　　跡〉
[1]泰雲寺跡　[2]細川家墓地　[3]轟水源地及び樋管　[4]堀内氏善の墓　[5]轟（宮庄）貝塚
[6]遊目台　[7]スリバチ山古墳　[8]迫ノ上古墳　[9]名和行直の墓　[10]山川青山の墓
[11]不知火諾右衛門の墓　[12]宇土城跡（西岡台）　[13]椿原古墳

つつじヶ丘自然公園

市街地から西へ約2km離れた標高70mの小高丘で，頂上一帯が自然公園となっています。数種類の天然つつじが自生し，シーズン（4月～5月）には色とりどりの花を咲かせます。又，桜も多く花見等には特に賑わいます。

〈自　然　環　境〉

● 千体仏の水［熊本県選定名水百選］

九州最大規模のヨシ原

〈史　　跡〉

1梅崎古墳　2尾上横穴群　3千体仏　4天神山古墳　5仮又古墳

鶴の恩返し

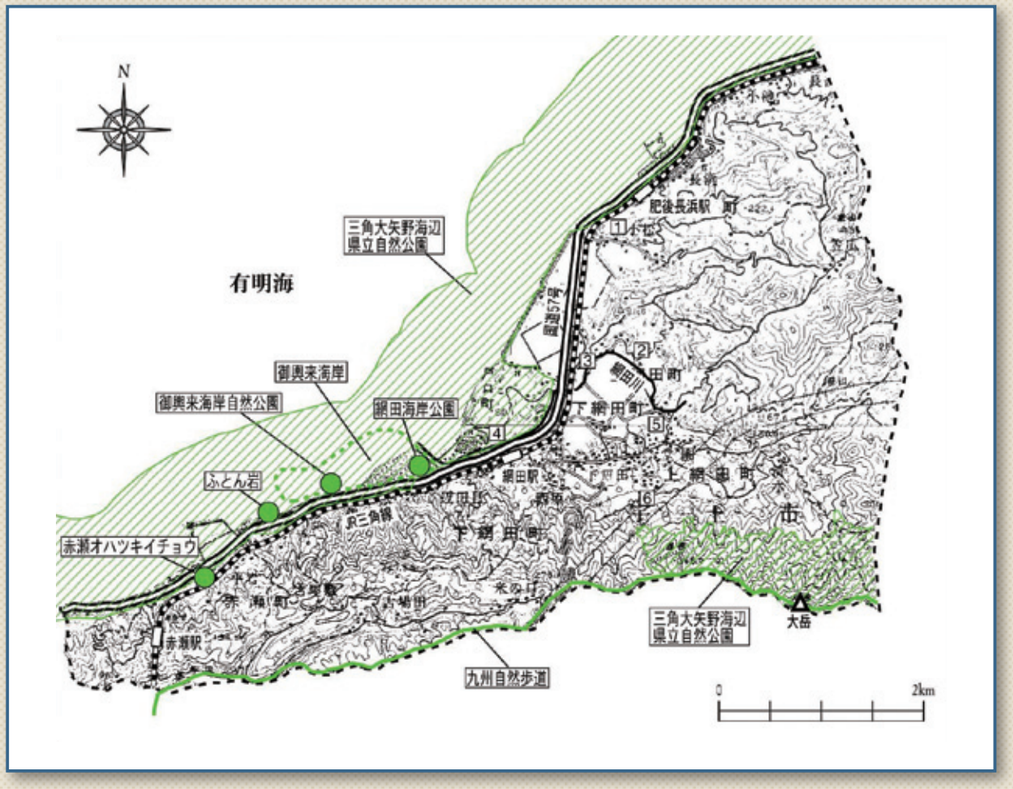
昔話として有名な，「鶴の恩返し」の伝説が残る地域が宇土にもあるのをご存じでしょうか。
昔，轟に住んでいた夫婦のもとに美しい娘（助けた鶴の化身）がやってきて，3粒で釜一杯のご飯が炊ける不思議な米と，いくら織っても糸が絶えない不思議な糸巻きを差し出し，養女になります。しかし，噂を聞きつけた国司が娘を差し出せと要求したことから，娘は鶴の姿に戻って飛んでいってしまうというお話です。
その鶴が消えたといわれるあたりは鶴見塚と呼ばれ，千部経を埋めた塚が残っています。

〈自　然　環　境〉

九州最大規模のヨシ原

浜戸川のヨシ原

緑川河口部と併せて、九州最大規模のヨシ原。
水質の浄化に寄与するとともに、干潟と併せて底生生物や鳥類などの生息地となっています。



〈地形・地質関連〉
- ふとん岩［環境省選定すぐれた自然］

〈動物・植物関連〉
- 赤瀬オハツキイチョウ［市指定天然記念物］

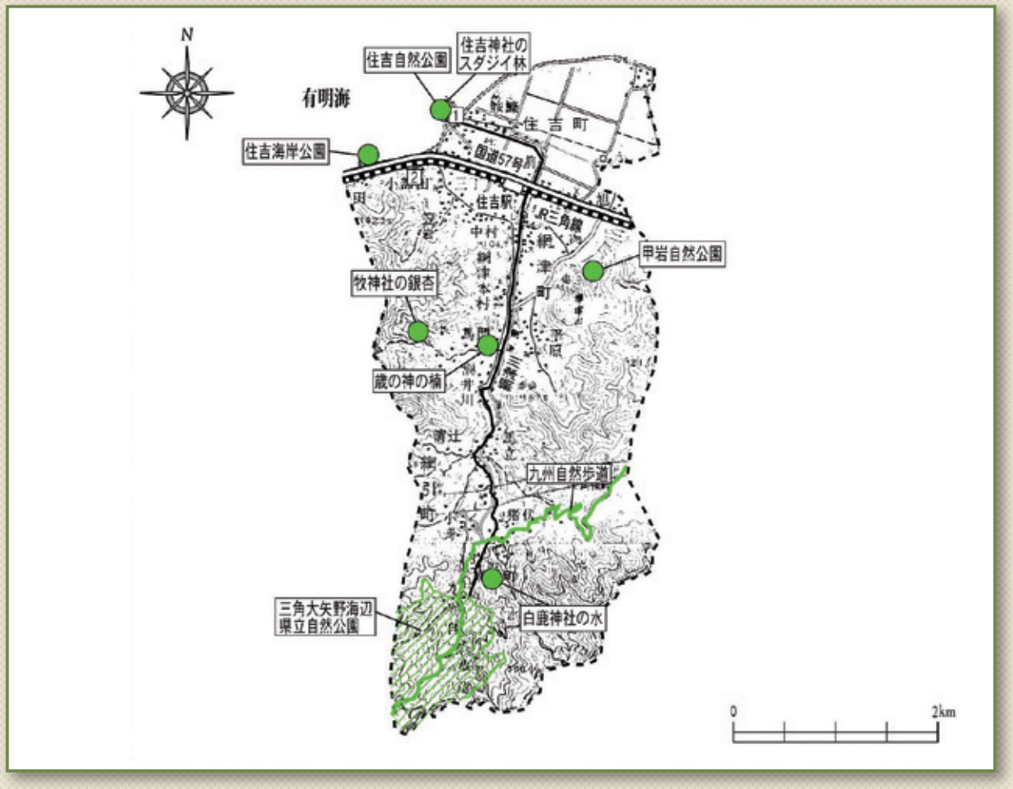
〈自　然　環　境〉
- 御輿来海岸［市指定名勝、環境省選定自然景観資源及び日本渚百景、熊本県指定郷土修景美化地域］
- ふとん岩［環境省選定自然景観資源］
- 三角大矢野海辺県立自然公園

〈公　園　関　連〉
- 御輿来海岸自然公園
- 網田海岸公園
- 九州自然歩道

〈史　　跡〉
1小松古墳　2ヤンボシ塚古墳　3網田城古墳群　4寛政の津波供養塔　5網田焼窯跡
6長福寺（薬師堂）跡

宇土マリーナ

道の駅宇土マリーナは，漁師水揚げの新鮮な魚が自慢の物産館です。農家の朝採れ野菜・果樹・花・加工品など四季折々の農産物や海産物を多く取りそろえており，工芸品なども販売しています。クルージングも楽しめるヨットハーバーも隣接。



〈動物・植物関連〉
- 住吉神社のスダジイ林［環境省指定特定植物群落（自然林）］
- 歳の神の楠［市指定天然記念物］
- 牧神社の銀杏［市指定天然記念物］

〈自　然　環　境〉
- 白鹿神社の水［熊本県選定名水百選］
- 三角大矢野海辺県立自然公園

〈公　園　関　連〉
- 住吉海岸公園
- 住吉自然公園
- 甲岩自然公園
- 九州自然歩道

〈史　　跡〉
1住吉公園　2小部田横穴墓群

甲岩（かぶといわ）自然公園

加藤清正がかんがい用に造ったと伝えられる通称「七曲堤」一帯です。
春には桜，秋にはコスモスが咲き，冬は野鳥の飛来地として知られています。

01

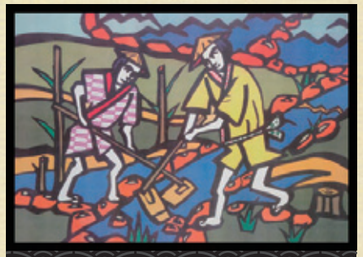
今からおよそ３４０年ほど昔の江戸時代、第４代将軍徳川家綱公のころのお話です。
そのころ宇土を治めていたのは、細川行孝（ほそかわゆきたか）公という殿様でした。

02

当時、宇土の町の飲み水は塩分が多く、水の質が大変悪かったので、飲み水として使用できる井戸もなく、人々はとても困っていました。
行孝公は、このことを大変心配し、町の人々がおいしい水を飲めるようにする良い方法はないものかと考えました。

03

宇土の南西部には白山という山があり、そのふもとに、たくさんの水が湧き出ている所がありました。
その場所は、轟水源（とどろきすいげん）と呼ばれ、村人の憩（いこ）いの場所となっていました。



04

行孝公は、水道を作ってこの美しい水を約3キロ離れた宇土の町まで引けないだろうかと考え、家老に命じて調べさせました。
当時は土木工事の技術も進んでおらず、今のように便利な機械もなかったので、大変難しい工事になると思われましたが、飲み水に困っている人々の苦労を思うと、じっとしてはいられません。

05

さっそく水源地の開発にとりかかり、まず、武士たちの家々に飲料水として水道を引くことから始めました。
水源から水道管をつなぎ、地中に埋め込む工事を行った村人たちは、やぶで覆（おお）われた土地を開墾（かいこん）するのに一苦労でした。暑い日も寒い日も休むことなく、雨の日には蓑（みの）をまとって工事に精を出さなければなりませんでした。

06

水道管には松橋焼と呼ばれる焼き物の土管を使いました。土管は直径が20センチ、長さが43センチの丸い筒で、全部で1万2千本も使われたそうです。土地の高いところは掘り下げ、低いところには土を盛って塘（とも）をつくり、土管を埋めていきました。この塘は、水道塘（すいどうとも）とよばれています。

07

この水道は約4カ月をかけて完成しました。武家屋敷にはそれぞれ井戸が作られ、水道管から水が送られました。
町の人々のためには、共同井戸が作られ、誰でも手軽に利用できるようにしました。武士も町人もこの水道のお陰で、冷たくきれいな水を飲むことができるようになり、大変喜びました。

08

しかし、この水道も１００年ほど経つと、土管が傷んで水が漏れたり、濁ったりするようになってきました。
第5代藩主の細川興文（ほそかわおきのり）公は、この様子を知り、改修工事をしようと決心しました。

09

興文公は土管に代わるものはないかと考え、網津町の馬門（まかど）というところで採れる、ピンク色の石に目をつけました。この石は馬門石（まかどいし）と呼ばれ、大昔から大王の棺や、神社の鳥居などに利用されてきた石でした。くりぬきやすく、土管よりもはるかに丈夫なすぐれた石です。

10

いよいよ改修工事が始まりました。石工たちは、馬門石を約40センチメートル角、長さ80センチメートルの長方形に削り、溝を彫って、管を作りました。そして、管の上には、同じ馬門石のふたが乗せられました。管と管は、ガンゼキと呼ばれる接着剤を使ってつなぎ合わせました。このガンゼキは、水の中でも固まるという特殊な性質をもっていました。

11

この水道にはいろいろな工夫が凝（こ）らされました。水道管のあちこちに、石でできた、桝（ます）と呼ばれる貯水槽が作られました。
これによって、桝と桝の間で管が壊れたときの発見や修理がしやすくなり、桝にたまった水は、消火用水として使用されました。また、ところどころに水量を調節するための落ち口が設けられました。
落ち口から流れ出た水は、田畑に水を引き、土地を潤すための灌漑用水（かんがいようすい）として利用されました。

12

この改修工事は西暦１７６９年に完成しました。轟水源地（とどろきすいげんち）のわきには、再修轟泉碑（さいしゅうごうせんひ）が建てられ、この一大改修工事のことを今に伝えています。この碑は、永遠にこの水源に水音がとどろき、勢いよく流れ続けるさまを見守り続けることでしょう。

13

この水道は轟泉水道（ごうせんすいどう）と呼ばれ、以来ずっと宇土の町を潤し続けてきました。そして今でも宇土の１００戸ほどの家で生活用水として使われています。轟泉水道は、現在、日本で使われている上水道の中では最も古い水道です。
轟水源は、近年日本名水百選にも選ばれ、宇土市内外から毎日たくさんの人たちが水を汲みに訪れています。そして、今も昔も変わらず人々の憩いの場所となっています。

memo

目次
Contents

1 宇土市歴史年表

3 小西行長

8 船場橋・天草四郎・門内界隈

9 陣屋跡・温知館跡・張り子・地蔵まつり

10 宇土城跡（西岡台）・宗福寺跡・宇土城跡（城山）

11 栗崎の天神樟・不知火諾右衛門・轟貝塚・椿原古墳

12 轟泉自然公園
（轟水源・轟泉水道・資料館・細川家墓地）

13 雨乞い大太鼓・椿原太鼓・宇土御獅子舞

14 如来寺・如来坐像・晩免古墳

15 境目遺跡・曽畑貝塚・楢崎古墳

16 向野田古墳・山王さんまつり

17 マルメロ場・渡し跡・嘉永新川・栗嶋神社

18 千体仏・天神山古墳・仮又古墳

19 住吉自然公園
（風流島・住吉灯台・ドゥルー碑・紫陽花コンサート）

20 小部田横穴墓群・伊津野の板碑・あじさいの湯
長部田海床路・網津の里山

21 馬門石

22 大王のひつぎ・彫刻シンポジウム

23 網津川眼鏡橋群・白鹿神社・歳の神の楠・牧神社

24 御輿来海岸・網田駅・網田神社

25 網田焼の里・中園邸・網田焼窯跡

26 城二号墳・田平城跡・ヤンボシ塚古墳・網田ネーブル

27 長福寺跡・景行天皇・寛政の津波供養碑
赤瀬オハツキイチョウ

28 参考資料（平成16年度制作）
宇土・轟・花園・走潟・緑川・網津・網田

35 紙芝居「轟泉水道物語」

37 紙芝居「孝行娘」

むかしむかし、宇土の城下町に、それはそれはたいへん親孝行の娘がおりました。それは今から４００年ぐらい前のことで、宇土の城のお殿様は、名和伯耆守顕孝（なわほうきのかみあきたか）という人でした。

ある日のことです。お殿様は自分の領地を自分の目で確かめたいと、一人で城を抜け出して、あちこちを見て歩きました。
領地を見てまわる途中でおなかが減り、町はずれの茶屋に入りました。

お殿様は、娘のすすめるお茶を飲み、箱に並べられた小さなかわいい餅（もち）を見つけました。
「娘、それをくれ。」といい、一口食べました。
まるくて白い、そして小さいけれど、とってもおいしい餅でした。
この餅は、娘のお静とその母が毎日作る手作りの餅でした。

お殿様は、「うまかった。」と言って金を払わずさっさと茶屋を出て行こうとしました。
いつもは家来衆を連れていますので、自分で金を払うことなどありません。
うっかり店を出てしまいました。

お静は、お殿様の顔など知るはずがありません。
それで、お殿様の袖（そで）をひっぱり
「お客さん、お代をちょうだいいたします。」
お殿様は、はっと思いました。
ふところを探りましたが、一分（いちぶ）の金もありませんでした。

お殿様は、自分が着ている羽織の小袖（こそで）を切って娘に渡し、
「これをもってお城に来てもらいたい。そのときお代を取らす。」
と言って、さっさと帰ってしまいました。

お静はあの時うっかりして名前を聞くことを忘れていましたが、
「この紋どころは城主、お殿様のものだ。」
「ご無礼なことだ。このままでは済まんぞ。」
「娘ばかりじゃない。お母さんの命も危ないぞ。」
「こら、えらいことになったぞ。」
と町中が大騒ぎとなり、お静は不安になりました。

お静は小袖をもってお城に出かけ、
「知らぬこととはいえ、お殿様へのご無礼、せめて、お母さんの命だけは助けてください。」
とお願いしました。

すると殿様が、
「感心な娘よ、おまえの親孝行に免じて、褒美（ほうび）をとらせよう。」
と言い、帰りにはお代とたくさんの褒美をもらって帰りました。
それから、お静とその母が作る小さな餅は宇土の名物となり、今では小袖餅（こそでもち）と呼ばれるようになりました。

memo

うと 歴史・観光ガイド

宇土市観光物産協会 TEL.0964－22－1111㈹
（宇土市商工観光課内）
〒869-0492　熊本県宇土市浦田町51
宇土市観光物産協会ホームページ　http://city-uto.com/

宇土市観光物産協会

宇土市教育委員会文化課 TEL.0964－23－0156
〒869-0433　熊本県宇土市新小路町95
宇土市ホームページ　http://www.city.uto.kumamoto.jp

宇土市観光情報サイト